

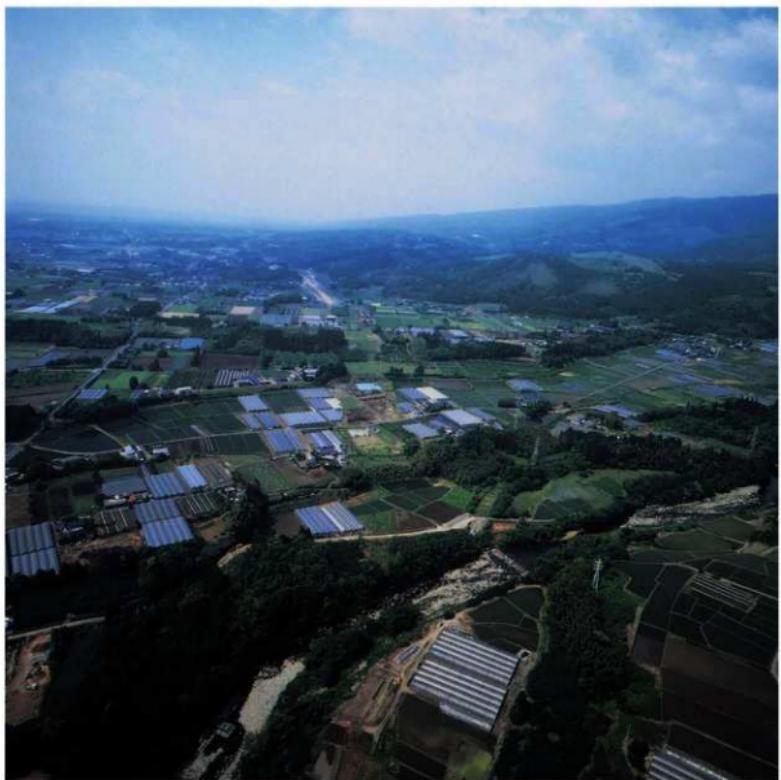
はちまん
八幡第2遺跡

Hatiman 2 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 43

2007

宮崎県埋蔵文化財センター



八幡第2遺跡遠景（手前：名貫川 奥：尾鈴山方面）

卷頭図版 2



A-2区調査区



S A 8 炭化材検出状況

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成 11 年度から実施しております。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

本書に掲載した八幡第 2 遺跡は、平成 16 年度から 17 年度に発掘調査を行ったものです。川南町に所在し、縄文時代草創期の集石遺構や隆帶文土器、弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されました。特に検出した竪穴住居跡 9 軒のうち 5 軒で、多くの炭化材や焼土を伴う焼失住居が見つかりました。また、竪穴住居跡からは多くの土器が出土し、その中には 7 号住居出土の長頸壺のように高知県との交流をうかがい知ることができるものもあり、貴重な資料です。

ここに報告する内容が学術資料となるだけでなく学校教育や生涯学習の場などで活用され、また埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・御協力を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 清野 勉

例言

1. 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、平成 16 年度から 17 年度にかけて、宮崎県教育委員会が実施した児湯郡川南町所在の八幡第 2 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成 17 年 10 月 1 日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。
3. 現地での実測等の記録は、安部直人・大山博志・向江修一・森本征明・山下健一が行い、発掘作業員が補助した。
4. 整理作業は埋蔵文化財センターで行い、実測図の作成及び浄書は森本が行った他整理作業員が補助した。
5. 本書中の遺構写真及び遺物写真は安部・森本が撮影したものを使用した。
6. 測量・空中写真撮影・自然科学分析は、次の機関に委託した。

基準杭設置：(有) 久保田測量設計

空中写真：(有) スカイサーベイ九州

年代測定・植物珪酸体分析・樹種同定・種実同定：(株) 古環境研究所

7. 本書に使用した遺構の略記号は次のとおりである。
S A … 竪穴住居跡 S C … 土坑 S E … 溝状遺構 S I … 集石遺構
8. 本書に使用した地図は国土地理院発行の 1/25,000 地形図をもとに、遺跡周辺地形図等は日本道路公団宮崎工事事務所から提供の 1/1000 測量図をもとに作成した。
9. 本書で用いた標高は海拔高であり、方位は座標北 (G.N.) を基本とし、遺構実測図等の一部に磁北を (M.N.) を用いた。
10. 国土座標は、旧国土座標第Ⅱ系を基に設定している。
11. 土層及び土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
12. 本書の執筆・編集は森本が担当した。
13. 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡例

1. 採図の縮尺

遺構分布図 = 1:200, 1:250, 1:300, 1:400

遺構実測図 = 1:20, 1:60, 1:80

土器 = 1:4 石器 = 1:2, 1:3 を基本とし、以外のものを含めて採図中にその縮尺を明示した。

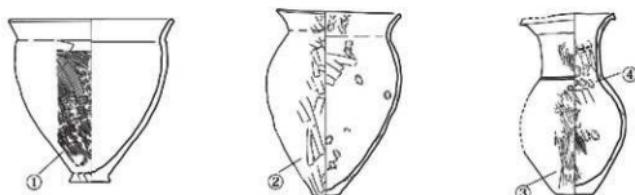
2. 図版の縮尺

遺構・遺物写真などの縮尺については任意であり、統一していない。

3. 土器観察表の計測値は、単位は cm である。

4. 土器の実測図中の記号・表示は下記に示す。

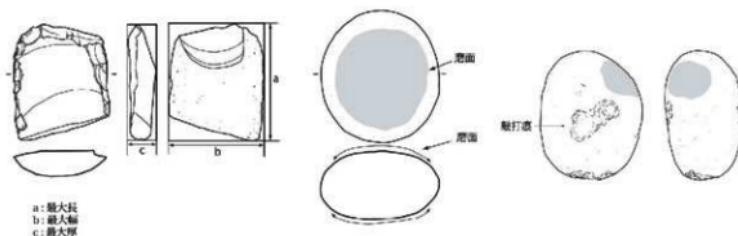
赤生土器の調整



①はハケ目、②は板状工具によるナデ、③はヘラミガキ、④指頭痕

5. 石器計測表の計測値は、下記の計測方法によるものである。単位は cm, g である。

6. 石器実測図中の記号や表示は以下のものに示す。



7. 本書に記載する層序について

層（テフラ・ローム層）の呼称は、『平成 16 年度東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書 V』第 1 章第 3 節の記載に準じる。

本文目次

第I章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第II章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第III章 調査の経過	
第1節 確認調査の概要	4
第2節 発掘調査の方法	4
第3節 整理作業及び報告書作成	4
第IV章 調査の記録	
第1節 調査の概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 繩文時代草創期の遺構と遺物	8
第4節 繩文時代早期の遺物	11
第5節 弥生時代の遺構と遺物	14
第6節 時期不明の遺構	51
第V章 自然科学分析	
第1節 目的	54
第2節 放射性炭素年代測定	54
第3節 樹種同定	55
第4節 植物珪酸体分析（灰像分析）	56
第5節 炭化種実同定	56
第VI章 まとめ	
第1節 繩文時代草創期	60
第2節 弥生時代後期	60

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	3	第11図 V層出土石器実測図	13
第2図 周辺地形図及び確認調査トレーンチ配置図	5	第12図 A-1区遺構分布図	14
第3図 グリッド配置図	6	第13図 S A 1・S A 3出土遺物実測図	14
第4図 B区土層断面図	7	第14図 S A 1・S A 3実測図	15
第5図 S I 1実測図	8	第15図 S A 2出土遺物実測図	15
第6図 VI層遺物分布図	8	第16図 S A 2実測図	16
第7図 VI層出土上器実測図	9	第17図 A-2区遺構分布図	16
第8図 VI層出土石器実測図	10	第18図 S A 4実測図	17
第9図 自然流路実測図・土層断面図	11	第19図 S A 4フローデーション区割図	17
第10図 赤化殻の集まり実測図	12	第20図 S A 4出土遺物実測図1	18
		第21図 S A 4出土遺物実測図2	19
		第22図 S A 5実測図	20

第23図	S A 5 出土遺物実測図 1	21	第9表	弥生土器観察表 2	40
第24図	S A 5 出土遺物実測図 2	22	第10表	弥生土器観察表 3	41
第25図	S A 5 フローテーション区割図	22	第11表	弥生土器観察表 4	42
第26図	S A 7 実測図	23	第12表	弥生土器観察表 5	43
第27図	S A 7 フローテーション区割図	23	第13表	弥生土器観察表 6	44
第28図	S A 7 貼床除去後実測図	24	第14表	弥生土器観察表 7	45
第29図	S A 7 床面出土遺物実測図 1	25	第15表	弥生土器観察表 8	46
第30図	S A 7 床面出土遺物実測図 2	26	第16表	弥生土器観察表 9	47
第31図	S A 7 覆土出土遺物実測図 1	27	第17表	弥生土器観察表 10	48
第32図	S A 7 覆土出土遺物実測図 2	28	第18表	弥生土器観察表 11	49
第33図	S A 8 実測図	28	第19表	弥生時代石器計測表	50
第34図	S A 8 出土遺物実測図	29			
第35図	S A 8 焙土検出状況図	30			
第36図	S A 8 フローテーション区割図	30			
第37図	S A 9 実測図	31			
第38図	S A 9 出土遺物実測図	31			
第39図	S A 9 フローテーション区割図	32			
第40図	S A 10 実測図	33			
第41図	S A 10 出土遺物実測図	33			
第42図	S C 1 実測図	34			
第43図	S C 1 出土遺物実測図	34			
第44図	包含層出土遺物実測図	35			
第45図	擾乱土坑出土遺物実測図 1	36			
第46図	擾乱土坑出土遺物実測図 2	37			
第47図	擾乱土坑出土遺物実測図 3	38			
第48図	A-1区 S E 1~7 分布図	52			
第49図	A-1区 S E 1~7 土層断面図	52			
第50図	B区 S E 8~14 分布図	53			
第51図	B区 S E 8~14 土層断面図	53			

表 目 次

第1表	VI層出土土器観察表	9
第2表	V・VI層出土石器計測表	13
第3表	S A 4 出土種実同定表	17
第4表	S A 5 出土種実同定表	22
第5表	S A 7 出土種実同定表	24
第6表	S A 8 出土種実同定表	30
第7表	S A 9 出土種実同定表	32
第8表	弥生土器観察表 1	39

図 版 目 次

巻頭図版 1	八幡第2遺跡遠景(手前:名貫川 奥:尾鈴山方面)	
巻頭図版 2	A-2区調査区 S A 8 炭化材検出状況	
図版 1	A-2区・B区調査区全景	63
	縄文時代調査区(B区)	63
図版 2	縄文時代草創期調査区	64
	自然流路検出状況	64
	S I 1 検出状況	64
	S I 1 半截状況	64
	赤化礫の集まり 1	64
	赤化礫の集まり 1 半截状況	64
	赤化礫の集まり 2・3 検出状況	64
	隆帶文土器出土状況	64
図版 3	A-1区調査区全景(北より)	65
	A-1区調査区全景(東より)	65
	S A 1・S A 3 貼床面状況	65
	S A 2 貼床面状況	65
	S A 4 貼床面状況	65
	S A 5 貼床面状況	65
	S A 5 壺(52)出土状況	65
	S A 4・S A 5 貼床除去後	65
図版 4	S A 7 貼床面状況	66
	S A 7 遺物出土状況	66
	S A 8 焙土検出状況	66
	S A 8 貼床面状況	66

S A 9 貼床面狀況	66
S A 9 炭化材檢出狀況	66
S A 10 貼床面狀況	66
S A 9・S A 10 貼床除去後	66
圖版 5 S A 7・S A 9・S A 10 貼床除去後	67
S A 8 貼床除去後	67
圖版 6 S C 1 遺物出土狀況	68
A - 1 区 S E 1	68
A - 1 区 S E 4・S E 5	68
B 区 S E 8 檢出狀況	68
B 区 S E 8・S E 10~14	68
B 区 S E 8・S E 9	68
B 区 S E 8・S E 11~14	68
B 区 S E 12~14	68
圖版 7 第VI層出土土器	69
第VI層出土石器	69
第V層出土石器	69
S A 1~3 出土遺物	69
S A 4 出土遺物	69
圖版 8 S A 5 出土遺物	70
S A 8 出土遺物	70
圖版 9 S A 7 出土土器	71
S A 7 出土石器	71
圖版 10 S A 9 出土遺物	72
S A 10 出土遺物	72
S C 1 出土遺物	72
攬亂土坑出土土器 1	72
攬亂土坑出土土器 2	72

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年2月に基本計画が決定し、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに平成9年12月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、宮崎県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は平成11年度から日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

本遺跡では、平成15年11月13日～16年2月20日に確認調査を実施した。確認調査は調査区内に町道が通っていることから、A区とB区とに分けて行われた。A・1区では弥生時代の遺物のほか竪穴住居跡が検出され、B区は溝状遺構や縄文時代の遺構・遺物が確認された。A・1区は、今回の調査部分以外に遺構が検出される部分はないとの判断され、確認調査で記録をとった。本調査については遺構・遺物が確認されたB区北東部を対象として実施された。また、A区南側に未調査部分があり、本調査と並行して確認調査を行うこととなった。本調査は平成16年12月1日～平成17年7月1日まで行われた。A区南側の未調査部分（A・2区）についてはトレンチ調査の結果、遺構・遺物が確認されたため、本調査の対象となった。整理作業は平成17年9月から実施し、平成18年度に終了した。

第2節 調査の組織

八幡第2遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良 弘康（平成15年度）

宮園 淳一（平成16・17年度）

清野 勉（平成18年度）

副所長兼総務課長

大蘭 和博（平成15・16年度）

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫（平成15～18年度）

副所長 加藤 恒郎（平成18年度）

総務課長

宮越 尊（平成17・18年度）

主幹兼総務係長

石川 恵史（平成15～17年度）

主幹兼総務担当リーダー

高山 正信（平成18年度）

調査第一課長

児玉 章則（平成15年度）

高山 富雄（平成16～18年度）

調査第一係長

谷口 武範（平成15・16年度）

主幹兼調査第一係長

長津 宗重（平成17年度）

主幹兼調査第一担当リーダー

長津 宗重（平成18年度）

主幹兼調査第二係長

長津 宗重（平成15・16年度）

菅付 和樹（平成17年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹（平成18年度）

（確認調査担当）

主査 阿部 直人（平成15年度）

主査 山下 健一（平成15年度）

（本調査担当）

主査 大山 博志（平成16・17年度）

主査 向江 修一（平成17年度）

（本調査・報告書担当）

主事 森本 征明（平成16～18年度）

調査指導（敬称略）

小畠 弘己〔熊本大学〕

泉 拓良〔京都大学〕

本田 道輝〔鹿児島大学〕

田崎 博之〔愛媛大学〕

柳沢 一男〔宮崎大学〕

広瀬 和雄〔国立歴史民俗博物館〕

大塚 昌彦〔渋川市教育委員会〕

赤塚 次郎〔愛知県埋蔵文化財センター〕

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

八幡第2遺跡（第1図1）は宮崎県川南町大字川南字八幡山に所在する。川南町は日向灘に面した宮崎県中部にあり、北に名貫川、南に小丸川に接している。町域の大部分は西部に位置する上面木山（標高1,040 m）から派生した洪積段丘面からなり、沖積地は町内中央部を流れる平田川河口部付近に僅かにみられるのみである。川南町の段丘面は14面に区分され、南から高城・川南・国光原・唐瀬原に大別される。本遺跡は川南町の北側を東流する名貫川右岸に位置し、川から2段目の河岸段丘に立地する。南側には川南町北部に広がる唐瀬原段丘面があり、その比高差は約20 mである。

第2節 歴史的環境

本遺跡の周辺では、川南町教育委員会及び都農町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査などによって、多くの遺跡が周知されている。近年、東九州自動車道関連の発掘調査によって発掘調査数は増大している。ここでは発掘調査の行われた遺跡を中心に、時代ごとに紹介する。

旧石器時代は、川南町後牟田遺跡（第1図2）中ノ迫第1遺跡（3）、前ノ田村上第2遺跡（4）、都農町では朝倉遺跡（5）、尾立第3遺跡（6）、立野第5遺跡（7）がある。数十基の礫群やナイフ形石器、角錐状石器等の石器が確認されている。

縄文時代は、前述の後牟田遺跡、川南町中ノ迫第2遺跡（8）、上ノ原遺跡（9）、国光原遺跡（10）、西ノ別府遺跡（11）、尾花坂上遺跡（12）、都農町立野第2遺跡（13）などが挙げられる。周辺で確認されている多くの遺跡は早期の集石遺構や穴が検出され、押型文土器や条痕文土器が出土している。しかし近年の調査では、草創期の隆帶文土器が出土した川南町赤石・天神本遺跡（14）、前ノ田村上第2遺跡や後・晚期の竪穴住居跡が検出された赤石・天神本遺跡など早期以外の調査例も増えつつある。

弥生時代の遺跡は、前期の調査例はないが、中

期以降では中期末の竪穴住居跡が検出された川南町藏座村遺跡（15）、中期末～後期の竪穴住居跡が検出された川南町湯牟田遺跡（16）がある。後期以降になると、遺跡数は増大し、それに伴い調査例も増加している。川南町東平下遺跡（17）、市納上第1遺跡（18）、赤石・天神本遺跡、大内原遺跡（19）、中の迫A遺跡（20）、中ノ迫第2遺跡、前ノ田村上第1遺跡（21）、前ノ田村上第2遺跡、赤坂遺跡（22）、把言田遺跡（23）、野稻尾遺跡（24）、国光原遺跡、湯牟田遺跡、尾花A遺跡（25）、都農町新別府下原遺跡（26）などが挙げられる。湯牟田遺跡や赤坂遺跡では、20軒以上の竪穴住居跡が検出されている。湯牟田遺跡や前ノ田村上第2遺跡では、多量の炭化材と焼土が遺存する焼失住居が検出されている。湯牟田遺跡の炭化材の多くは建築部材と考えられ、その中には垂木や桁（または梁）と推定できるものもある。また都農町では新別府下原遺跡や境ヶ谷第1遺跡で発掘調査が行われ、新別府下原遺跡では竪穴住居跡や周溝状遺構が検出されている。

古墳時代になると大規模な古墳群が台地上に築造される。川南町川南古墳群（27）は前方後円墳25基、円墳25基で現存している。最大規模の39号墳は柄鏡式の前方後円墳で全長112 mを測る。詳細な築造時期は不明であるが、墳形から4世紀後半に位置づけられる。集落遺跡では尾花A遺跡で古墳時代初頭～前期にかけての竪穴住居跡群が検出されている。そのほか登り口第2遺跡（28）で中期の竪穴住居跡が1軒検出されている。

古代以降としては、上垂門で奈良時代後半～平安時代前期の蔵骨器を伴う火葬墓が挙げられる。また『延喜式』に記載された日向の駅馬のうち、去飛駅は都農町に、児湯駅は木城町に比定されており、川南町は去飛と児湯駅を結ぶ古代幹線道路の存在が推測される。

発掘調査では、銀座第1遺跡（29）や前ノ田村上第1遺跡で中世から近世の区画溝に囲まれた掘立柱建物跡群が検出されている。そのほか湯牟田遺跡では12～14世紀代の掘立柱建物跡群、溝状遺構などが検出されている。



- 1 八幡第2遺跡 2 後牟田遺跡 3 中ノ迫第1遺跡 4 前ノ田村上第2遺跡 5 朝合遺跡 6 尾立第3遺跡 7 立野
 第5遺跡 8 中ノ迫第2遺跡 9 上ノ原遺跡 10 国光原遺跡 11 西ノ別府遺跡 12 尾花坂上遺跡 13 立野第2遺跡
 14 赤石・天神本遺跡 15 蔿原村遺跡 16 湯牟田遺跡 17 東平下遺跡 18 市納上第1遺跡 19 大内原遺跡 20 中の
 迫A遺跡 21 前ノ田村上第1遺跡 22 赤坂遺跡 23 把言田遺跡 24 野稻尾遺跡 25 尾花A遺跡 26 新別府下原遺跡
 27 川南古墳群 28 登り口第2遺跡 29 銀座第1遺跡 (▲は東九州自動車道(都農~西都間)建設に伴う発掘調査遺跡)

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

第Ⅲ章 調査の経過

第1節 確認調査の概要

確認調査は、平成15年11月13日～平成16年2月20日に実施した。調査対象面積は15,490m²で北側をA区、南側をB区として調査を行った。A区の一部は住宅の基礎部分が残っており、本調査前に確認調査を行った。調査は、幅3m、長さ5～80mのトレンチを23箇所設定し、K-Ah上面まで掘り下げ遺構の有無の確認を行った(第2図)。

A区では、耕作等による削平でK-Ahは部分的な残存であった。K-Ahの残存域で住居と思われるプランと弥生土器が確認された。そこで遺構の確認された周辺を広げ、竪穴住居跡が3軒検出された。

B区では北東部(10T～15T)と南東部(16T～20T)と堆積状況が異なる。北東部では、K-Ahが良好に残存し、溝状遺構が検出された。また、遺構が検出されなかった部分を3m四方のトレンチで深掘を行ったところ、15Tで集石遺構1基と繩文土器等の遺物を確認した。一方、南東部では、削平をうけ、砂礫層の露出している部分が多くみられた。土層が堆積している部分においても、堆積は薄く、遺構、遺物は確認されなかった。

以上のことからA区、B区(北東部)を本調査とし、B区南東部は本調査の必要がないと判断した。A区については、遺構が確認された部分以外は削平が著しく、遺構の存在する可能性がなかったため、今回の調査で記録をとることとなった。

また、本調査に先立ってA区の一部の未調査部分について試掘調査を行ったところ、24T、25Tで弥生土器が多く出土した。26Tでは遺構・遺物は確認されなかった。26Tでは表土下すぐに砾が多く混じる搅乱層となり、その下は砂礫層となった。確認調査の結果、南側1,000mを本調査対象とし、北側は本調査の必要ないと判断した。

第2節 発掘調査の方法

1 調査の方法と調査区の設定

調査区は、確認調査で付した区分けで、北側A区、南側をB区として平成16年12月1日から調査を

実施した。A区については、確認調査時に終了した部分があり、その部分をA-1区とし、今回調査分をA-2区とし、A-2区、B区を並行して実施した。

B区は確認調査ではK-Ah上面で遺構が検出され、その下層は部分的な調査であったため先行してトレンチによる遺構・遺物の有無を確認した。

その結果、北側1,000mは遺構・遺物がなく、砾が流れ込んだ状況であったため調査終了部分とした。南側1,500mについては、南端の500mはVI層まで掘り下げ、残り部分はV層まで全面掘り下げ、VI層以下はトレンチでの掘り下げを実施した。調査区は国土座標に準じ南北に1～15、東西にA～Rの10×10mのグリッドを設定した(第3図)。

2 現地説明会

平成17年5月14日に現地説明会を実施した。現地説明会は、広く町内外の方々に遺跡発掘調査の状況を紹介することにより、郷土の歴史の一端に触れていただき、地域から出土した埋蔵文化財および埋蔵文化財保護行政に対する認識と理解を一層深めてもらうという趣旨に基づき実施した。主な内容としては、発掘状況や検出遺構の説明、出土遺物の展示・説明を行った。

73名の参加を得ることができ、説明会の趣旨は達したと考えている。

第3節 整理作業及び報告書作成

1 整理作業

整理作業は、埋蔵文化財センターにおいて以下の行程で行った。

平成17年8月～10月

・遺物(土器、石器)の水洗、注記

平成17年10月～平成18年3月

・遺物の接合

平成18年4月～6月

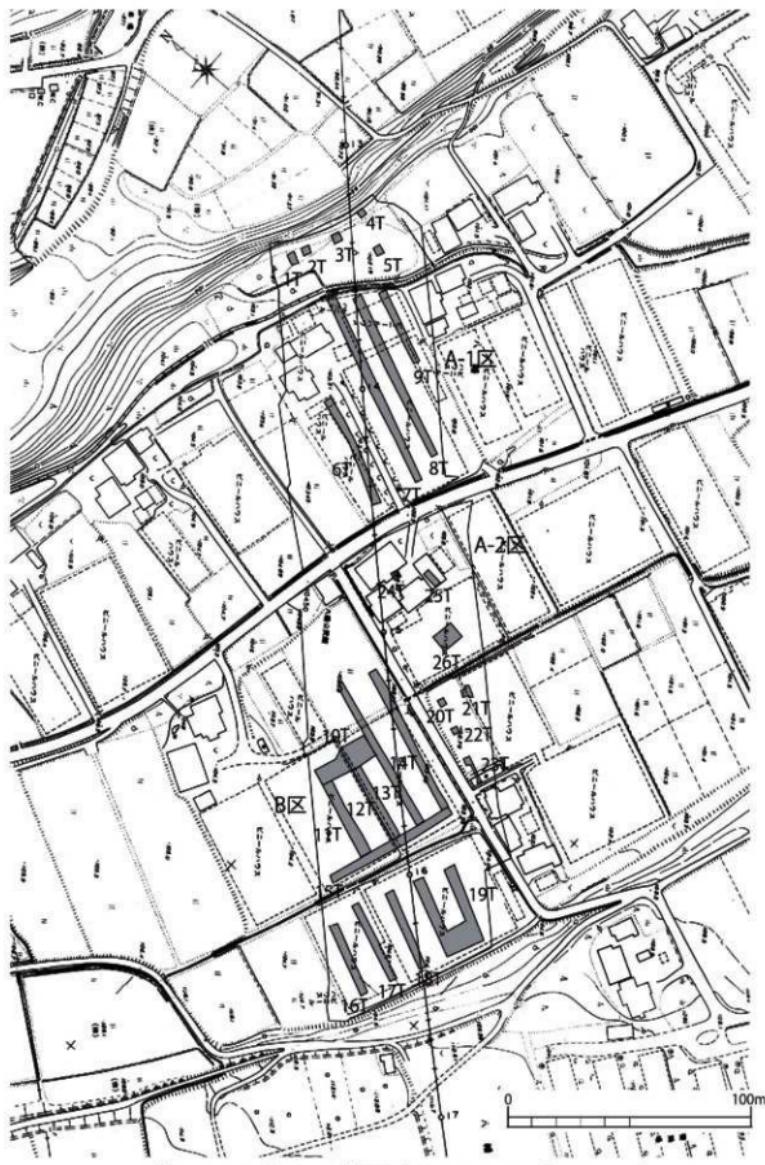
・報告書掲載遺物(石器、土器)の実測

平成18年6月～7月

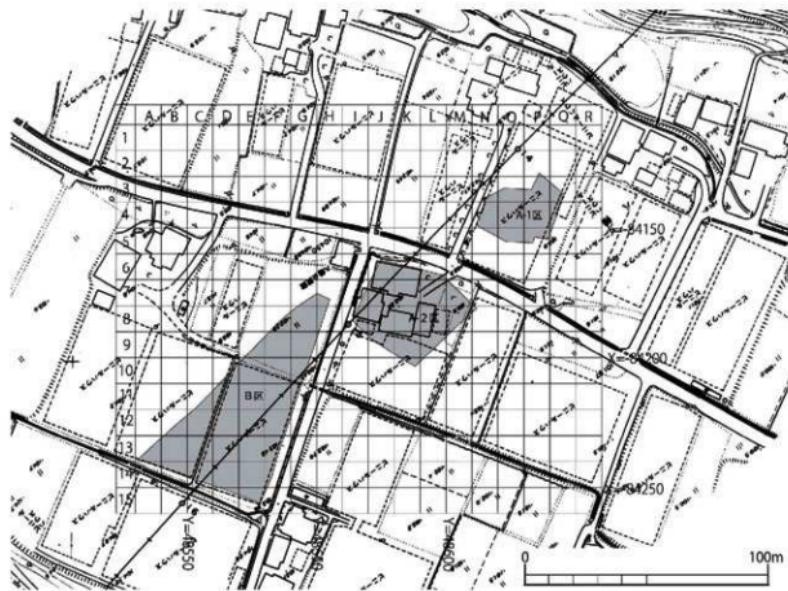
・報告書掲載遺物及び遺構図等のトレース

2 報告書作成

報告書作成は整理作業と並行して行い、平成18年11月に作成を完了した。



第2図 周辺地形図及び確認調査トレンチ配置図 (S= 1/2,000)



第3図 グリッド配置図 (S=1/2,000)

第IV章 調査の記録

第1節 調査の概要

本遺跡の調査では、縄文時代草創期と弥生時代後期の遺構・遺物が確認された。

縄文時代草創期については、B区VI層で集石遺構1基検出され、遺物としては隆帯文土器、打製石斧などが出土している。

B区V層では、打製石器が4点出土している。

弥生時代後期は、A-1区で竪穴住居跡3軒、A-2区で竪穴住居跡6軒、土坑1基検出され、弥生土器、石庖丁、磨石、砥石などが出土している。

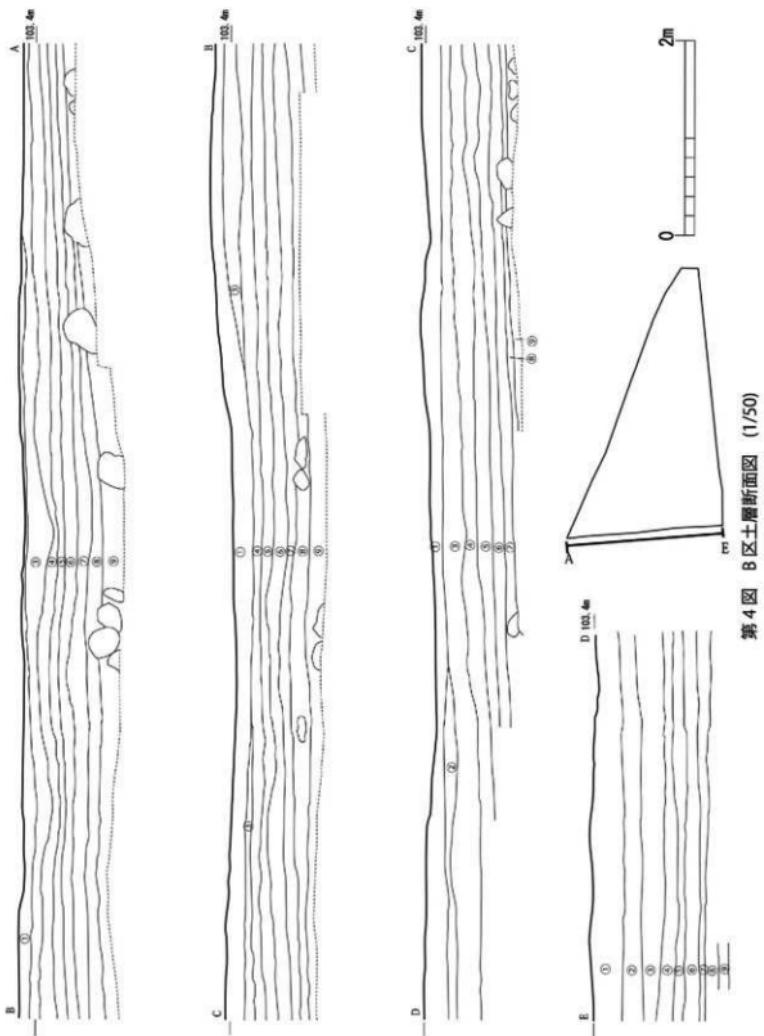
そのほかに時期不明の溝状遺構がA-1、B区で検出されている。

第2節 基本層序

本遺跡で確認された層序は、概ね以下のとおりであるが、B区の自然流路北側周辺では第V層の下部にぶい黄褐色砂質土が0.3~0.5m程堆積し

ていた。またB区北半部では第VI層の下部に黒褐色土がみられる(第4図)。

- ①第I層：表上（耕作上）で、層厚は平均0.2m。
 - ②第II層：黒色土 やや粘性があり、クロボクに相当し、弥生時代後期遺物包含層
 - ③第III層：K-Ah層
 - ④第IVa層：黒褐色土（MB0上部相当層）
 - ⑤第IVb層：黒褐色土（MB0下部相当層）④より白色砂粒を多く含む。
 - ⑥第V層：黒褐色土（ML1上部相当層）白色砂粒を含む。
 - ⑦第Vb層：暗灰黃褐色土（ML1下部相当層）白色砂粒を含む。
 - ⑧第VIa層：にぶい黄褐色土・褐色砂粒を含む。縄文時代草創期遺物包含層
 - ⑨第VIb層：にぶい黄褐色土・褐色砂粒を含む。
 - ⑩よりしまりがない。
- 第VII層：砂礫層



第4図 B区土壤断面図 (1/50)

第3節 縄文時代草創期の遺構と遺物

B区南端部で集石遺構が1基検出された。集石遺構の検出層位はVI層の中位であった。遺物は集石遺構の周辺で、土器片と石器、剥片がV層下部～VI層中部で出土した。土器は、隆帶文土器と無文の脇部片が出土した。口縁部を中心に6点掲載した。石器は、打製石斧、石核、剥片が出土した。

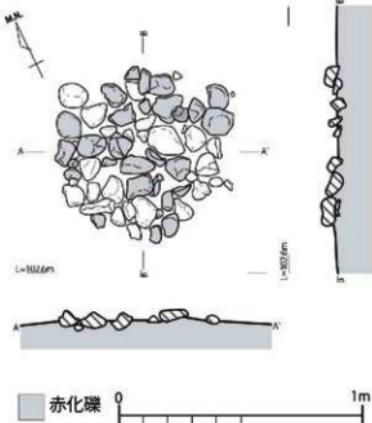
遺構内から土器の出土はなかったが、同層位から出土した土器から縄文時代草創期に属する遺構と考えられる。

(遺構)

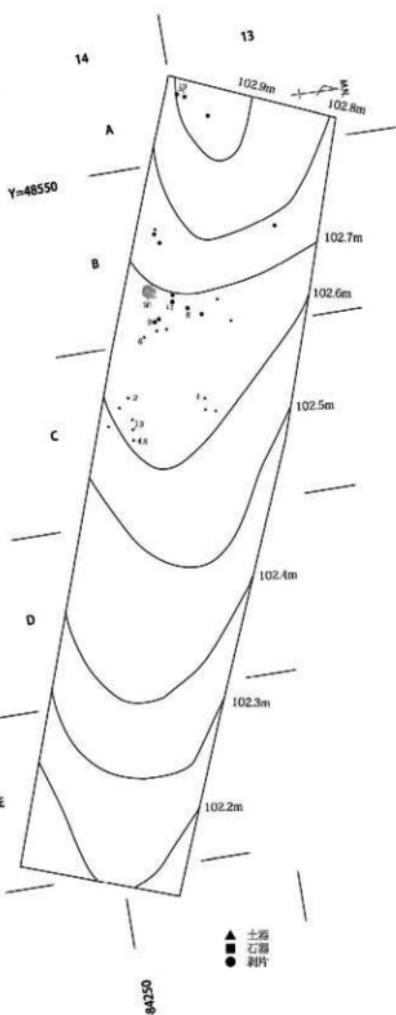
S I 1 (第5図)

$72 \times 67\text{cm}$ の楕円形に礫が分布する。60個の礫で構成され、掘込みはない。構成礫の約50%が赤化しており、石材は全て尾鈴山酸性岩類である。遺構内の礫のうち4個が接合した。

礫と礫の間や周辺で確認された炭化物を加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。その結果、遺構内の炭化物は、 $11,400 \pm 60\text{年BP}$ (1σ の曆年代でBC11,820～11,740, 11,530～11,210年)、周辺の炭化物では $11,310 \pm 60\text{年BP}$ (同BC11,500～11,200年)の年代値が得られた。



第5図 S I 1実測図 (1/20)



第6図 VI層遺物分布図 (1/250)

〔遺物〕

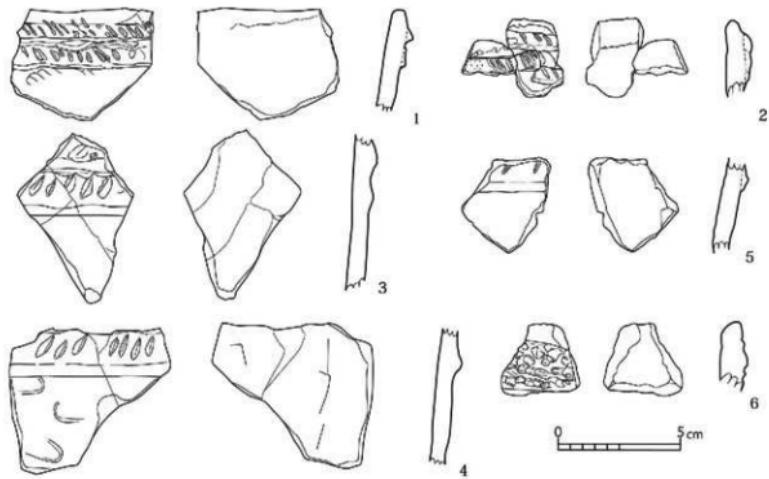
土器（第7図）

出土した隆帶土器は、胎土、色調、隆帶の貼付け方、隆帶上の文様などから次のように分類できる。

第1類（1,2） やや赤みがかった褐色の胎土である。口唇部は丸く仕上げられ、隆帶が口縁部から5mm程下に施文される。隆帶は指でつまみあげるように貼り付け、断面形は三角形である。隆帶上の文様は、爪形文が施されている。

第2類（3～5） にぶい黄橙色の胎土である。いずれも脣部片で、口唇部の形状は不明である。隆帶は、撫でつけるように貼り付け、隆帶上に爪形文を施す。胎土、調整、色調、隆帶文の形状などから同一個体と思われる。

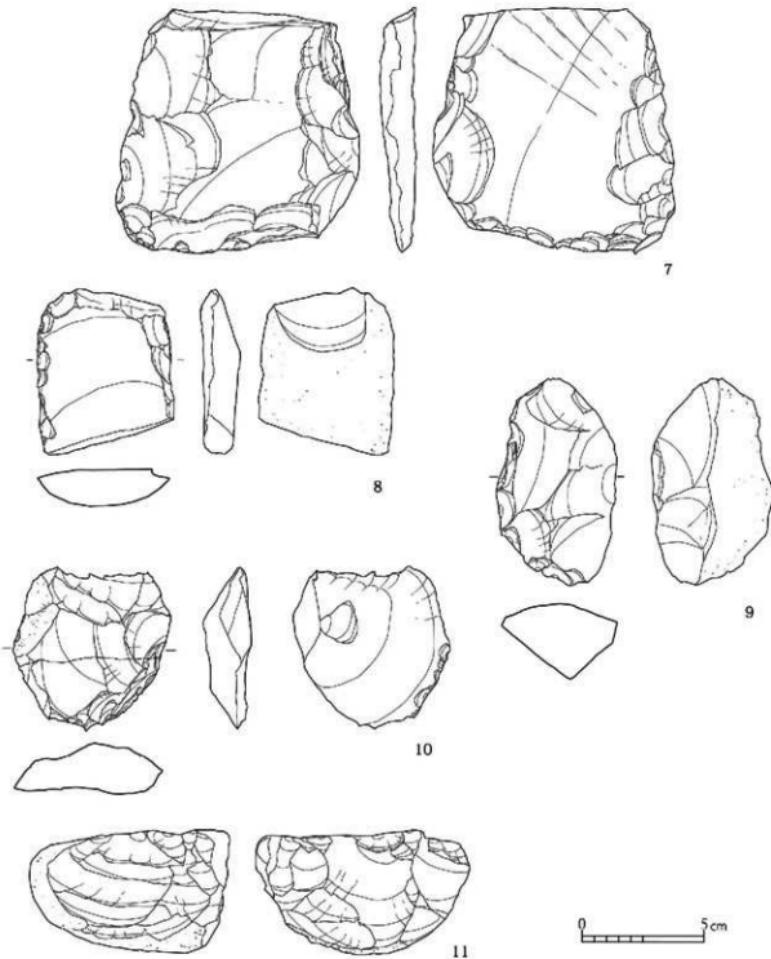
第3類（6） 胎土、色調は第1類に似る。口唇部は丸く仕上げられ、隆帶文が口縁部から5mm程下に施文される。隆帶の上を貝殻腹縁で刺突している。



第7図 VI層出土土器実測図（1/2）

第1表 VI層出土土器観察表

番号	遺物	出土区	群種	季代	出目	寸法（cm）	子法・調節・支撑等		色調		胎土の特徴	構成	備考	
							口縁	高さ	底径	外側	内側			
1	C14	南跡	口縁部							にぶい黄褐色 D10Y84/4	灰褐色 D10Y84/2	4mm以下にぶい黄褐色、2mm以下の底 部、口縁部に灰を含む。	良好	
2	C14	南跡	口縁部							赤褐色 D10Y84/9	黒褐色 D10Y84/2	2~4mmの褐色板、1mm以下の灰 白、褐色板を含む。	良好	
3	C14	南跡	脚部							にぶい褐色 D10Y85/4	にぶい黄褐色 D10Y85/2	1mm以下の灰白色板を含む。	良好	
4	C14	南跡	脚部				爪形文、ナデ、脚部 ざき			にぶい黄褐色 D10Y87/4	にぶい黄褐色 D10Y86/4	4mm以下の白色板、3mm以下の灰 白、2mm以下の深灰褐色を含む。	良好	
5	C14	南跡	脚部							にぶい黄褐色 D10Y87/2	にぶい黄褐色 D10Y87/2	1~2mmの褐色、灰白、灰色 色板を含む。	良好	
6	C14	南跡	口縁部				脚部文			にぶい褐色 D10Y85/4	灰褐色 D10Y85/2	1mm以下の灰白、乳白色板を含む。	良好	



第8図 VI層出土石器実測図 (1/2)

石器 (第8図)

出土した石器はいずれもホルンフェルス製のものである。7は、確認調査の21Tで出土した。打製石斧が基部が欠損している。8～11はA 13、C 14グリッドで出土した。8は打製石斧で刃部が

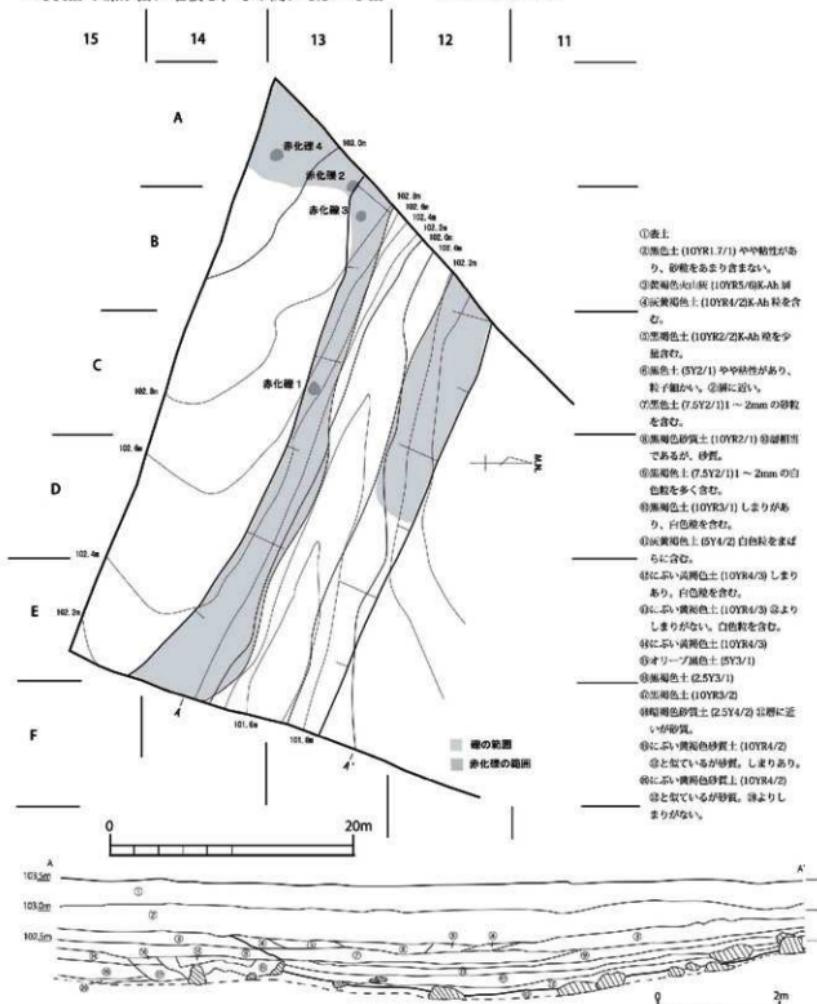
欠損している。10は削器で片側縁には背面から、もう片側縁からは腹面から加工を施し、刃部を作出している。9・11は石核である。

第4節 繩文時代早期の遺物

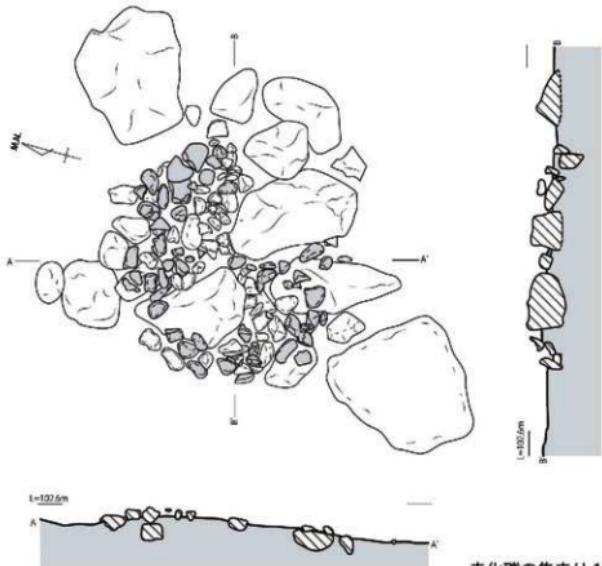
K-Ah下層のV層では、B12～F12グリッドで東西方向の自然流路が1条検出された。幅13m、深さ0.3～0.4mを測る。自然流路は、北側には10～30cmの疊が密に堆積し、その間に0.8～1m

の巨礫が点在する状態であった。南側では、5cm程の礫が点在する状況であった。

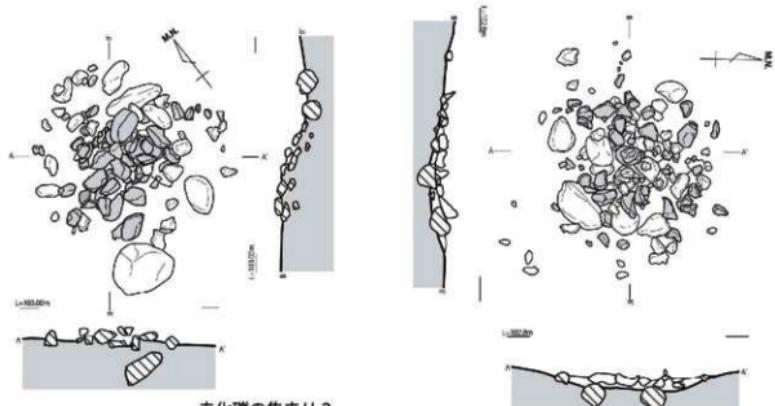
自然流路の肩附近に赤化した礫が集まった部分が5箇所確認された。そのうち3箇所について同化した(第9図)。



第9図 自然流路実測図(1/400)・土層断面図(1/80)



赤化礫の集まり 1



赤化礫の集まり 3

■ 赤化礫

0 1m

第10図 赤化礫の集まり実測図 (1/20)

赤化疊の集まり1（第10図）

1mほどの大きさの巨疊と巨疊との間に拳大の赤化した疊が集まる。87個の疊で構成されており、疊の集まりを半載したところ巨疊と巨疊との間にでききたくぼみに疊が入り込んだ状況であった。巨疊はいずれも赤化していない、埋土中から炭化物は確認されていない。赤化疊の石材は全て尾鈴山酸性岩類であった。

赤化疊の集まり2（第10図）

0.5～0.6mの範囲に10～20cmの赤化した円疊、破砕疊が密集している状態であった。集中箇所の周囲には20～30cmの円疊が堆積していた。石材は尾鈴山酸性岩類で、赤化疊の総数は81個である。

赤化疊の集まり3（第10図）

0.5～0.8mの範囲に10～20cmの赤化した円疊、破砕疊、10～30cmの赤化していない円疊が入り交じり密集していた。石材はいずれも尾鈴山酸性岩類で、赤化疊は45個あった。深い皿状の窪地に疊が堆積したと思われる。

第2表 V・VI層出土石器計測表

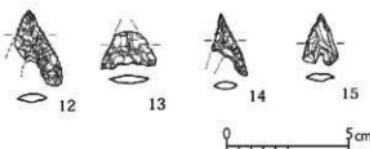
遺物番号	出土位置	出土測定	埋納	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
7 B 21 T	V	打製石斧	カルシフェルス	10.0	10.0	1.0	208.6		
8 B 14	V	打製石斧	カルシフェルス	6.8	5.6	1.5	77.2		
9 B 14	V	石核	カルシフェルス	8.5	4.9	3.1	108.7		
10 A 13	V	石核	カルシフェルス	6.7	6.5	2.1	73.6		
11 B 14	V	石核	カルシフェルス	5.1	6.8	8.1	188.7		
12 C 11	V	打製石錐	カルシフェルス	3.2	1.5	0.4	1.3		
13 D 14	V	打製石錐	チャート	1.5	2.3	0.4	1.1		
14 D 14	V	打製石錐	チャート	2.7	1.1	0.3	0.6		
15 C 12	V	打製石錐	サヌカイト	2.1	1.5	0.4	0.8		

石器（第11図）

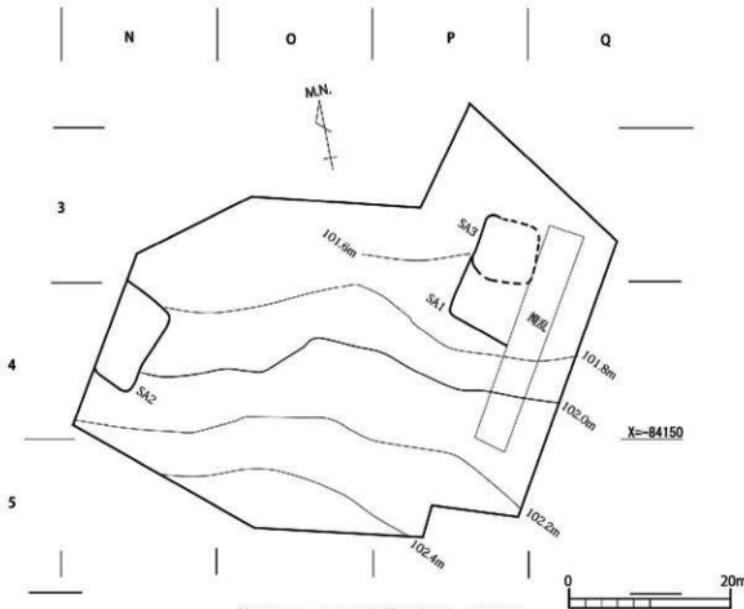
V層では、腰岳産黒曜石製・チャート製・サヌカイト製の打製石錐が4点出土している。

いずれも包含層中の出土で、自然流路をはさんだ両岸で出土している。

12は抉りが深く平面形は二等辺三角形をしており、脚部が欠損している。側面には丁寧な鋸歯状の調整が施されている。13は平面形が略正三角形を呈し、基部はわずかにへこむ。14は平面形二等辺三角形を呈し、抉りが深い。脚部が欠損している。15はサヌカイト製の石錐で比較的抉りは浅い。



第11図 V層出土石器実測図(1/2)



第12図 A-1区遺構分布図 (1/300)

第5節 弥生時代の遺構と遺物

A-1区で3軒の竪穴住居跡（第12図）、A-2区で6軒の竪穴住居跡と土坑1基（第17図）をⅢ層上面で検出した。A-1区は耕作等による擾乱が著しく、削平されている部分が多く、住居の検出状況は非常に悪い。一方A-2区では部分的に耕作等の擾乱があったのみで良好な土層堆積であった。

（1）竪穴住居跡（SA）

SA1（第13図、第14図）

【位置】A-1区P 3・4グリッドに位置する。SA3に切られる。

【規模】西側を擾乱により削平されており、残存部分は3.5mを測る。

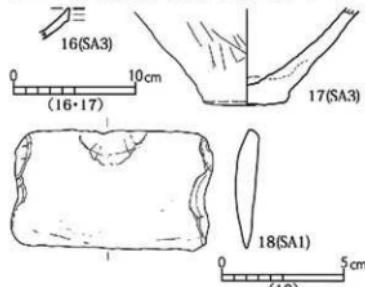
【柱穴】P 1はSA1に伴うピットであり、主柱穴と考えられる。柱掘り方は0.3m、深さ0.5mを測る。

【床面】床面は貼床が施される。貼床はK-Ahを含む黒色土で、しまっている。床面で炭化物が検出さ

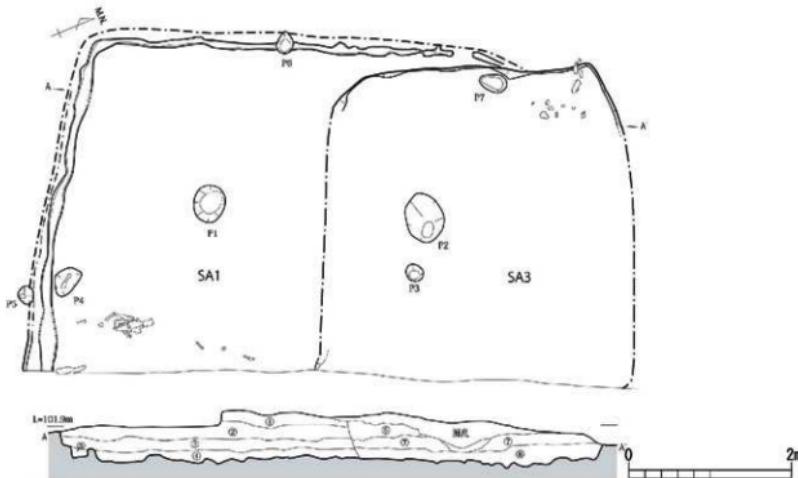
れた。

【壁帶溝】床面の壁沿いには壁帶溝がめぐっている。幅0.15m、深さ0.1mを測る。壁帶溝底面では杭列等は検出されなかった。

【出土遺物】床面、覆土中から土器片が出土しているが、小片で固化していない。覆土中からホルンフェルス製の抉り入り石庖丁が1点出土している。



第13図 SA1・SA 3出土遺物実測図 (1/2, 1/4)



①無色土 (TOYR1.7/1) 粒子種類く、粘性がある。②黒色土 (TOYR2/1) ①層と似ているが、わずかに黒みがぬけている。③無色土 (TOYR2/1) ③層と土質は似ている。1~5mmのK-Ah塊を含み、炭化物、土器片が混じる。④無色土 (TOYR1.7/1) K-Ahブロックと暗褐色土ブロックを2層程度含む。SA 1層と無色土 (TOYR2/1) 壁帶溝壁上無色土 (TOYR1.7/1) 粒子種類く粘性がある。⑤無色土 (TOYR1.7/1) 黏土種類く粘性がある。⑥無色土 (TOYR1.7/1) ④に比べK-Ahブロックと暗褐色土ブロックを多く含む。SA 3層

第14図 SA1・SA3実測図 (1/60)

SA2 (第15図、第16図)

【位置】 A-1区N 4グリッドに位置する。

【規模】 北側は上部が削平されており、推定ラインである。また、東側も道路がかかり全体を調査できなかつたため、規模については不明である。

【覆土の状況】 上部は黒色土が堆積し、床面直上に炭化物を多く含む黒色土がみられた。住居中央部に焼土層が確認された。

【柱穴】 2つのピットが検出され、柱掘り方は0.2~0.3m、深さ0.4mを測る。

【床面】 贼床が施され、床は1~2mmの砂粒を含む部分と含まない部分がある。中央に土坑を1基検出した。

【住居内土坑】 住居中央部に検出され、平面形は0.8×0.7mの楕円形で、深さ0.4mである。粘性のない黒褐色土が堆積し、土器片が出土している。

【出土遺物】 床面、覆土中から多くの土器片が出土している。住居の全体で出土しているが、床面では、中央部にやや密にみられる。

S A 3 (第13図、第14図)

【位置】 A-1区P 3グリッドに位置する。SA 1を

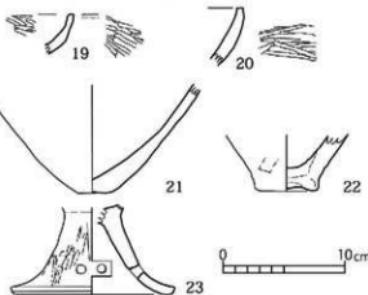
切っている。

【規模】 捣乱により削平されるが、一辺4mと推測される。

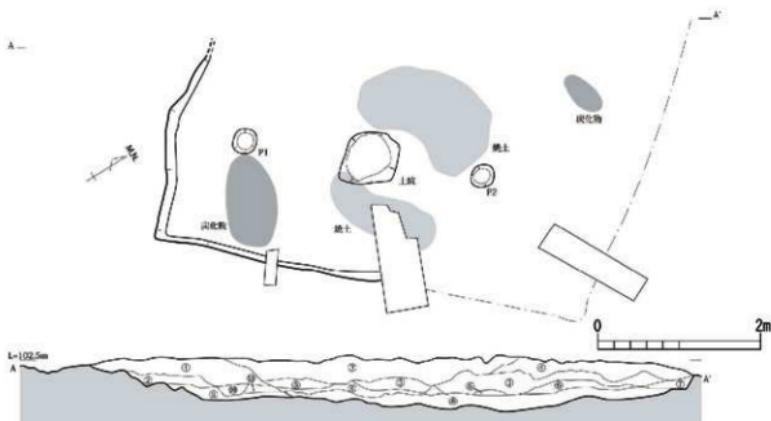
【柱穴】 P 3は床面で検出され、SA 3に伴い、主柱穴と考えられる。P 2は、貼床除去後に検出され、SA 1に伴う可能性が高いが不明である。

【床面】 床面は貼床が施され、硬くしまる。床面から炭化物が検出されている。

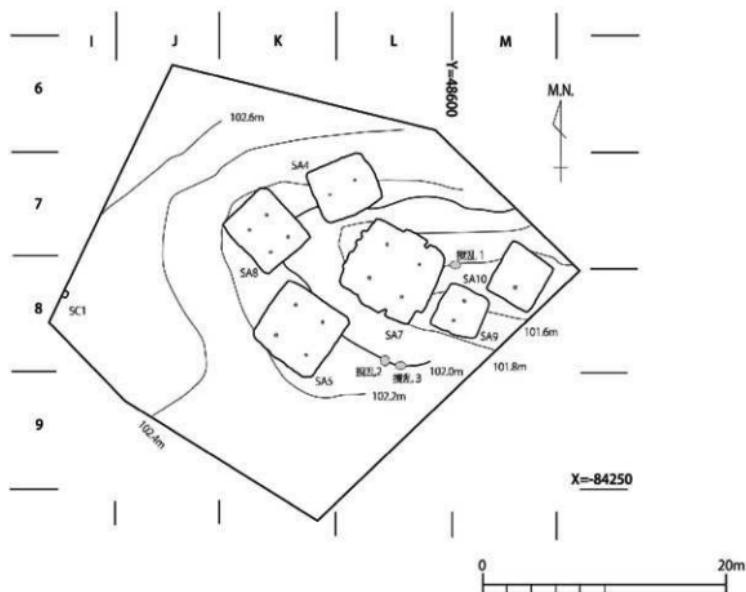
【出土遺物】 床面、覆土中から土器片が出土している。固化した2点は覆土中からの出土である。



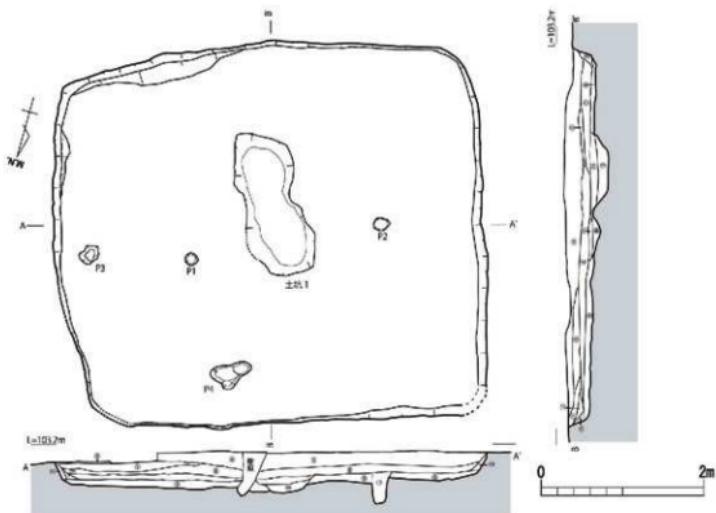
第15図 SA2出土遺物実測図 (1/4)



第16図 S A 2 実測図 (1/60)



第17図 A-2 区造構分布図 (1/400)



①褐色土(2.5YR2/1)K-Ah粒をわずかに含む。やや粘性がある。②褐色土(2.5YR2/1)K-Ah粒を少し含む。③よりやしまりがある。④褐色土(5Y2/1)K-Ah粒をわずかに含む。ややまろい。⑤黒褐色土(2.5Y3/1)やや粘性がある。⑥オーリーブ色(5Y2/2)やや粘性がある。K-Ahのブロックをわずかに含む。⑦黒褐色土(7.5Y2/1)K-Ahブロックをわずかに含む。やしまりがある。⑧黒褐色土(2.5Y3/1)とK-Ah粒の混合土(±6)硬くしまっている。(床面)⑨暗褐色土(7.5Y3/4)K-Ah粒をわずかに含む。前に述べた褐色土(5YR2/4)K-Ah粒が純土層となる砂黒色土(HYR1.7/1)粘性あり。しまりがない。⑩暗褐色土(2.5Y4/2)K-Ah粒を多く含む。⑪暗オーリーブ色土(2.5Y3/3)K-Ah粒をわずかに含む。⑫暗褐色土(2.5Y3/1)やしまりあり。K-Ah粒を含む。粘化物をわずかに含む。⑬褐色土(HYR2/1)しまりがなく、もろい。粘性がある。(柱穴)

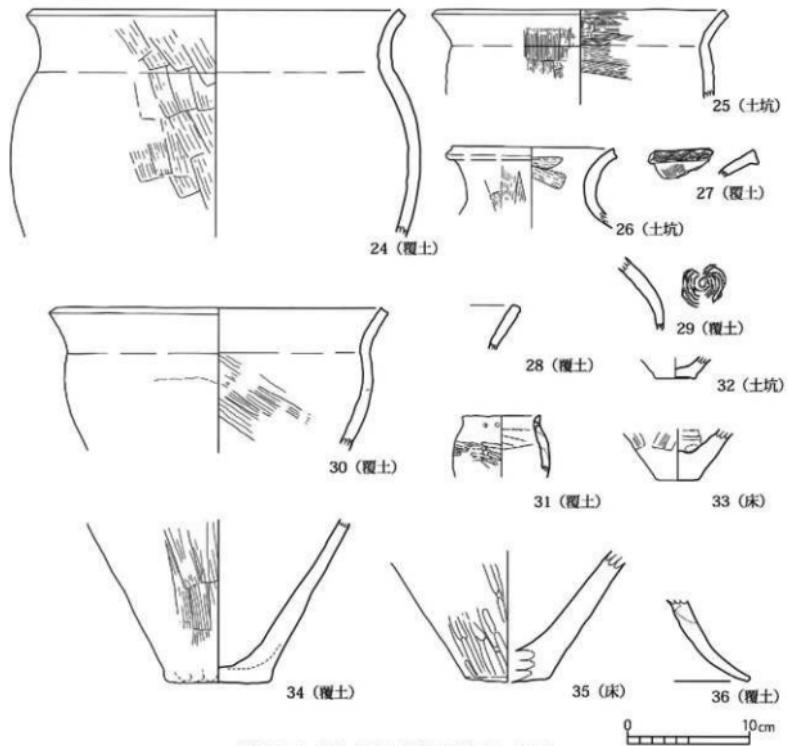
第18図 S A 4実測図 (1/60)

第3表 S A 4出土種実定同表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
7		不明種実		1	
10		不明種実		1	炭化物 片3
11		不明種実		1	炭化物 片6
14	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	炭化物 片5
15	Oryza sativa L.	イネ	果実	1	炭化物 片19
	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	1	
	Oryza sativa L.	イネ	果実片	1	
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	
22	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	3	
		不明種実		1	
	Oryza sativa L.	イネ	果実片	1	炭化物 片3
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	2	
33	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	4	



第19図 S A 4フローテーション区割図



第20図 SA 4出土遺物実測図1 (1/4)

SA 4 (第18図～第21図)

【位置】 A-2区K8グリッドに位置する。

【規模】 平面形は長方形の開丸方形プランで、平面規模は 4.7×5.3 mを測る。壁の残存高は、約0.2mで断面逆台形を呈する。床面積は 21.5m^2 である。

【柱穴】 主柱穴は2本である。柱掘り方は0.2～0.3mの円形で、深さは床面から0.4mを測る。

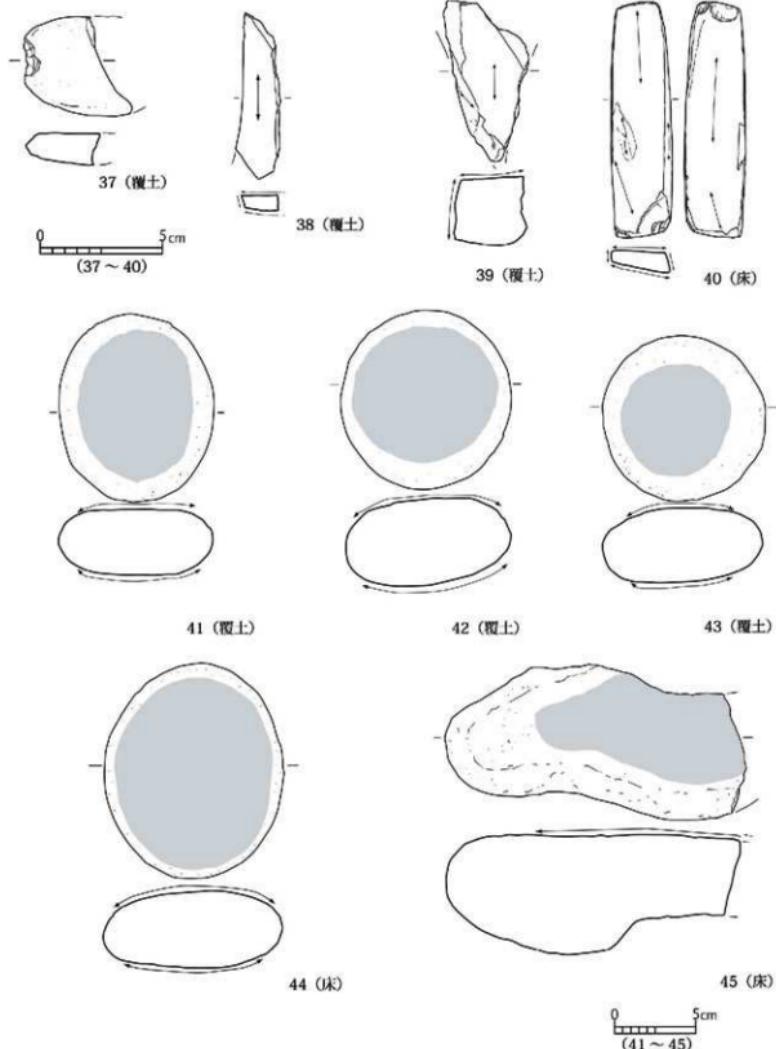
【床面】 床面は、全般的に硬化し、南東方向に向ずかに低くなる。住居中央に焼土を含む土坑が検出された。

【住居内土坑】 住居中央部に検出され、平面形は中央が狭まる瓢箪のような形状で $2.0 \times 0.3\text{m}$ を測る。南側部分からは焼けて赤化した礫が底面近くで

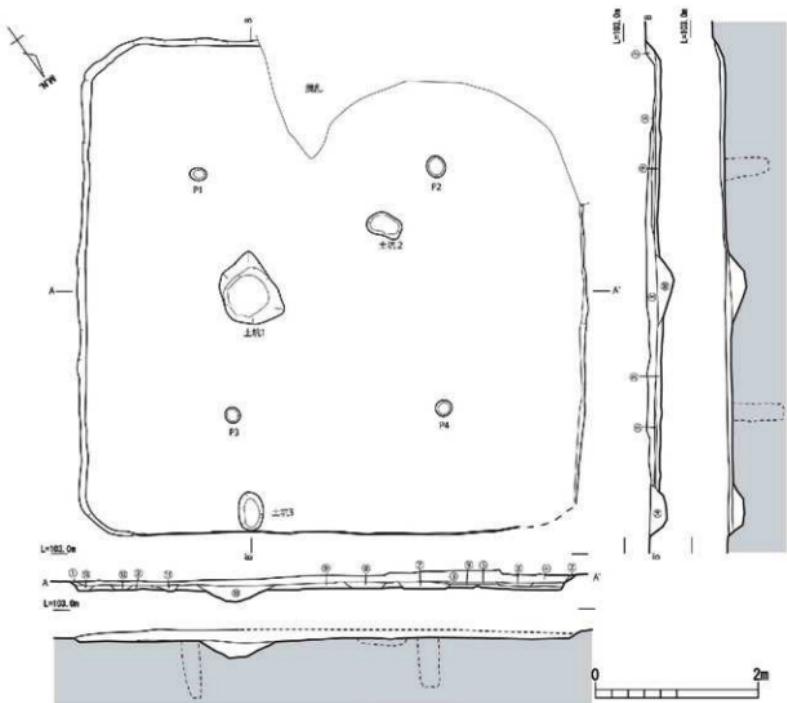
検出され、北側の部分では底面付近に焼土層がみられ、壁面も被熱による赤変を受けていた。

【出土遺物】 床面出土の遺物は少なく、掲載した分以外に数点の土器片があるのみである。砥石(38～40)と磨石(41～44)は住居の南端でまとまって出土した。埋土中からは、土器片や石器が多く出土し、そのうち14点を掲載した。27はおそらく壺の肩部片で外面に円を幾重に重ねたような線刻文が確認できる。

【フローテーション】 1mメッシュを設定し(第19図)、床面直上の土を探取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第3表のとおりである。



第21図 SA 4出土遺物実測図2 (1/2, 1/3)



①無色土 (10YR2/1) やや粘性あり ②黒色土 (10YR2/1) K-Ah 粒を少し含む。③無色土 (2.5Y2/1) 粘性あり ④無色土 (2.5Y2/1) やや粘性あり。K-Ah 粒をわずかに含む。⑤オリーブ無色土 (5Y2/2) 粘性あり。しまりがない。K-Ah 粒をわずかに含む。⑥無色土 (5Y2/1) 粘性あり。明褐色土を少し含む。⑦明褐色土 (2.5Y3/1) 粘性あり。ねずみに K-Ah 粒、暗褐色土を含む。⑧黒色土 (10YR2/1) K-Ah ブロックを少し含む。しまり強。貼土。⑨黒色土 (10YR2/1) K-Ah ブロックを多く含む。しまり強。貼土。⑩黒色土 (7.5Y2/1) 粘性あり。下部に暗褐色ブロックを含む。⑪オリーブ黒色土 (7.5Y2/2) わずかに K-Ah 粒を含む。⑫黒色土 (2.5Y2/1) K-Ah 粒を少し含む。⑬黒色土 (10YR2/1) やや粘性あり。⑭無色土 (5Y2/1) しまりがなく、粘性があり。

第22図 S A 5 実測図 (1/60)

S A 5 (第22図～第25図)

【位置】 A-2区K9グリッドに位置する。

【規模】 6×6 m の隅丸方形プランで、壁の残存高は約0.1mである。南西隅を削平されている。

【柱穴】 主柱穴は4本である。柱掘り方は0.15～0.25mの円形で、深さは最深のもので床面から0.6mを測る。柱痕跡は認められない。

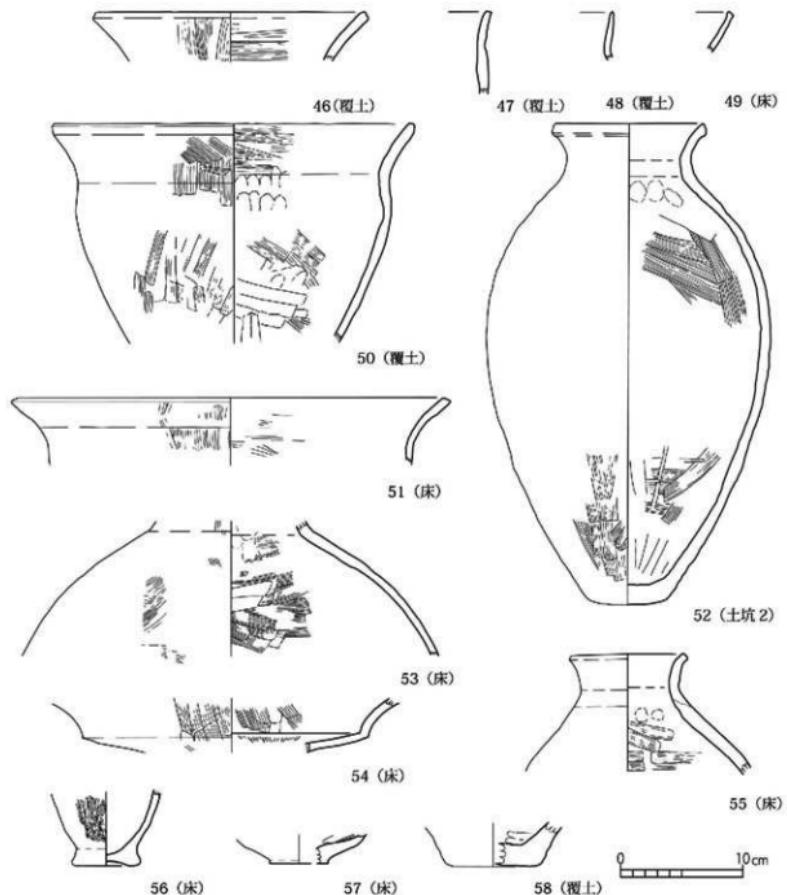
【床面】 床面は貼床に施され、全体的に硬化している。貼床はK-Ah粒を含む黒色土で堅くしまる。床面では土坑が3基検出された。

【住居内土坑】 住居中央に2基、南端に1基検出された。土坑1は、黒色土の埋土である。埋土中

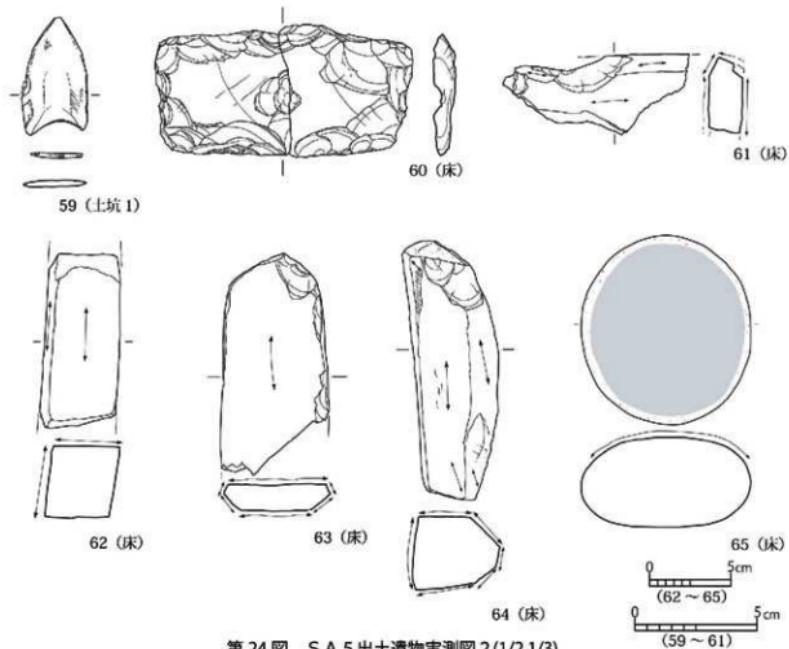
から磨製石鑿（59）が出土した。土坑2からは壺（52）が横に倒れた状態で出土した。埋土は黒褐色土でしまりのない土であった。

【出土遺物】 床面出土の遺物のうち15点を図化した。覆土中からは多くの土器片が出土した。図化できた5点を掲載した。

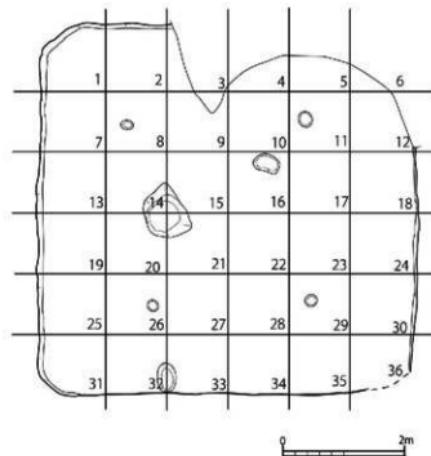
【フローテーション】 1mメッシュを設定し（第25図）、床面直上の土を探取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第4表のとおりである。



第23図 S A 5出土遺物実測図1 (1/4)



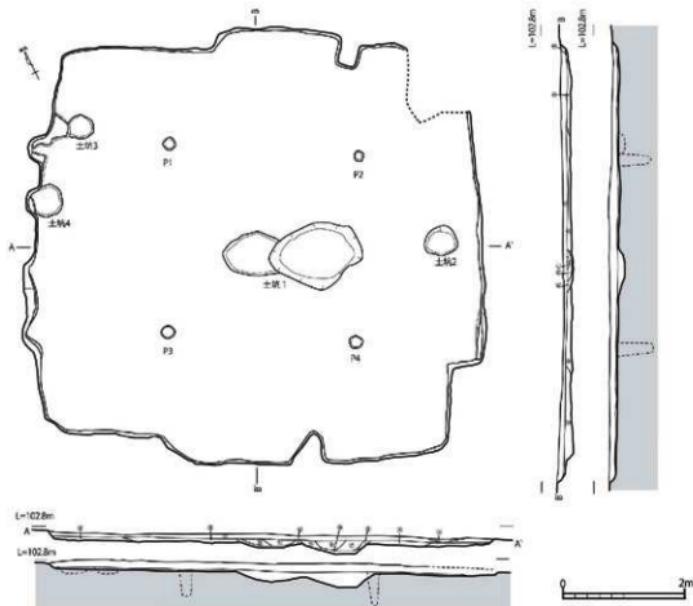
第24図 S A 5出土遺物実測図 2(1/2,1/3)



第25図 S A 5フローテーション区割図

第4表 S A 5出土種実同定表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
15	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	1	炭化物片 1
21	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	1	



①黒色土(10YR2/1)やや粘性がある。K-Ahをわずかに含む。②褐褐色土(2.5Y3/1)③黒色土(2.5Y2/1)とK-Ahの混合土。ややしまっている。(床面)④黒色土(2.5YR2/1)と褐褐色土の混合土。(7.7)しまりが強い。(床面)⑤黒色土(10YR2/1)しまりがない。暗褐色のブロックをわずかに含む。(床面)⑥黒色土(2.5Y2/1)やや粘性がある。(7.7)しまりがない。⑦褐褐色土(7.5YR2/2)粘土を含む。⑧明褐色土(7.5YR5/6)K-Ahが施工化している。⑨オリーブ色(2.5Y5/3)黒色土と焼土化したK-Ahが混ざっている。⑩黒色土(2.5Y2/1)サラサラしている。

第26図 S A 7 実測図 (1/80)

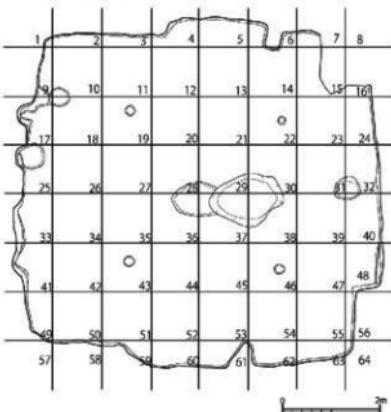
S A 7 (第26図~第32図)

【位置】A-2×L8・9 グリッドに位置する。

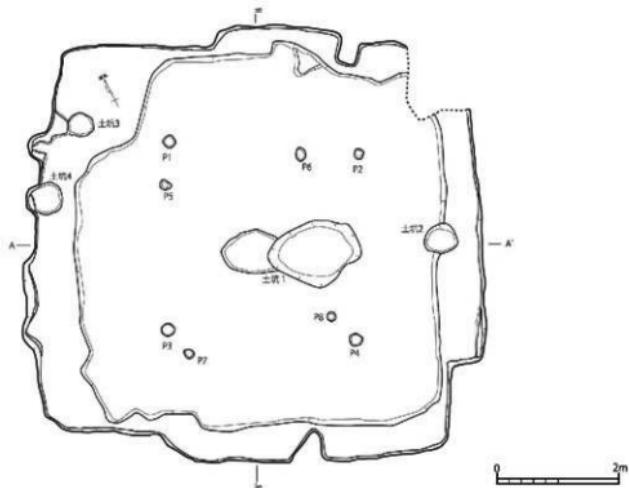
【規模】 $7 \times 6.5\text{m}$ の不定形の住居である。北、南、東部分に $0.2 \sim 0.3\text{m}$ の張り出しがあり、北、南部分の張り出しへは、ほぼ中央に 0.3m ほどの突出壁をもつ。北東部分は搅乱により削平されている。

【柱穴】主柱穴は4本である。柱掘り方は $0.15 \sim 0.25\text{m}$ の円形で、深さは最深のもので床面から 0.6m を測る。

【床面】床面は貼床が施されており、全体的に硬化している。張り出し部分の壁際ではやや高くなっていた。土坑は中央部に1基(土坑1)、その東側に1基(土坑2)、西側の壁際に2基(土坑3・4)検出された。



第27図 S A 7 フローテーション区割図



第28図 S A 7 貼床除去後実測図 (1/80)

【住居内土坑】 土坑1は、西側は上部に焼土層がみられ、底面には黒色土が堆積する。東側はやや粘性のある黒色土が堆積し、下部に焼土ブロックを含む黒褐色土が堆積する。

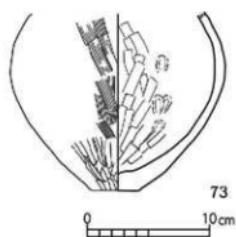
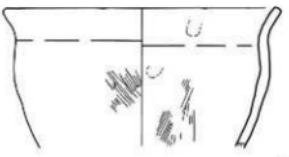
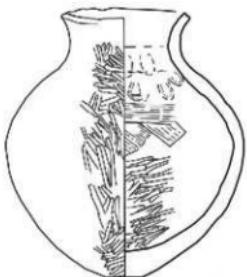
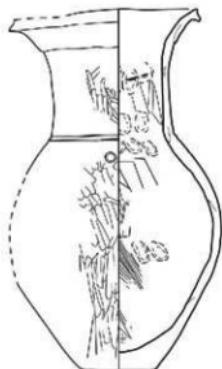
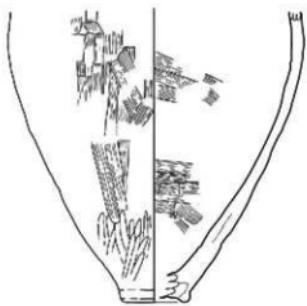
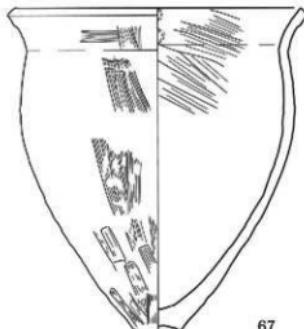
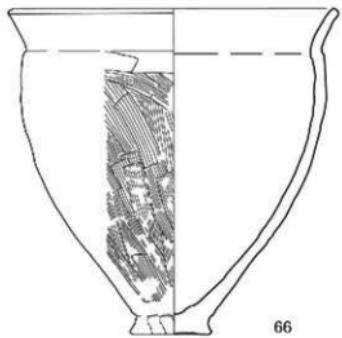
【出土遺物】 床面からは甕、壺、高环等多くの遺物が出土した。遺物は床全面で出土したが、北西～西側にかけてやや集中がみられた。71と83は南西端で出土し、83は器台で2/3程残存しており、立った状態で出土した。71は広口壺で口縁部から頸部が横に倒れた状態で83のすぐ横で出土した。

【フローテーション】 1 mメッシュを設定し(第27図)、床面直上の土を採取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第5表のとおりである。

【貼床除去後の状況】 周囲は浅く掘り下げ、薄く貼床を施している。それは張り出し部分にあたり、特に北端隅から西側にかけて広くなっている。中央部分は周囲より5～10 cm深く平坦に掘り下げている。貼床除去後P 5～P 8を検出した。これらの柱穴は、検出面から0.2～0.3mを測る。

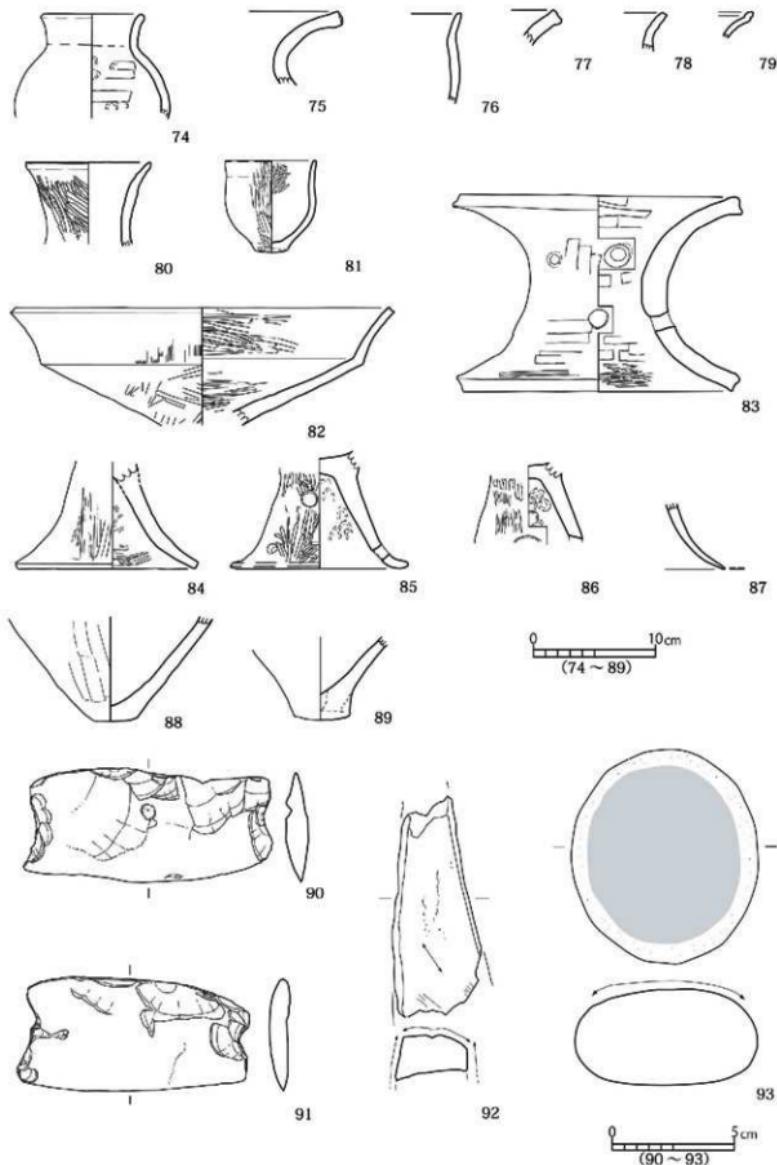
第5表 S A 7 出土種実同定表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
13	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	1	炭化物片1
22		不明種実		1	炭化物片4
26	Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉	1	
29	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	1	炭化物片1
52	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	3	炭化物片5
土坑1	Rubiaceae?	アカネ科?	種子	3	炭化物片3
土坑2	Oryza sativa L.	イネ	果実	1	炭化物片1

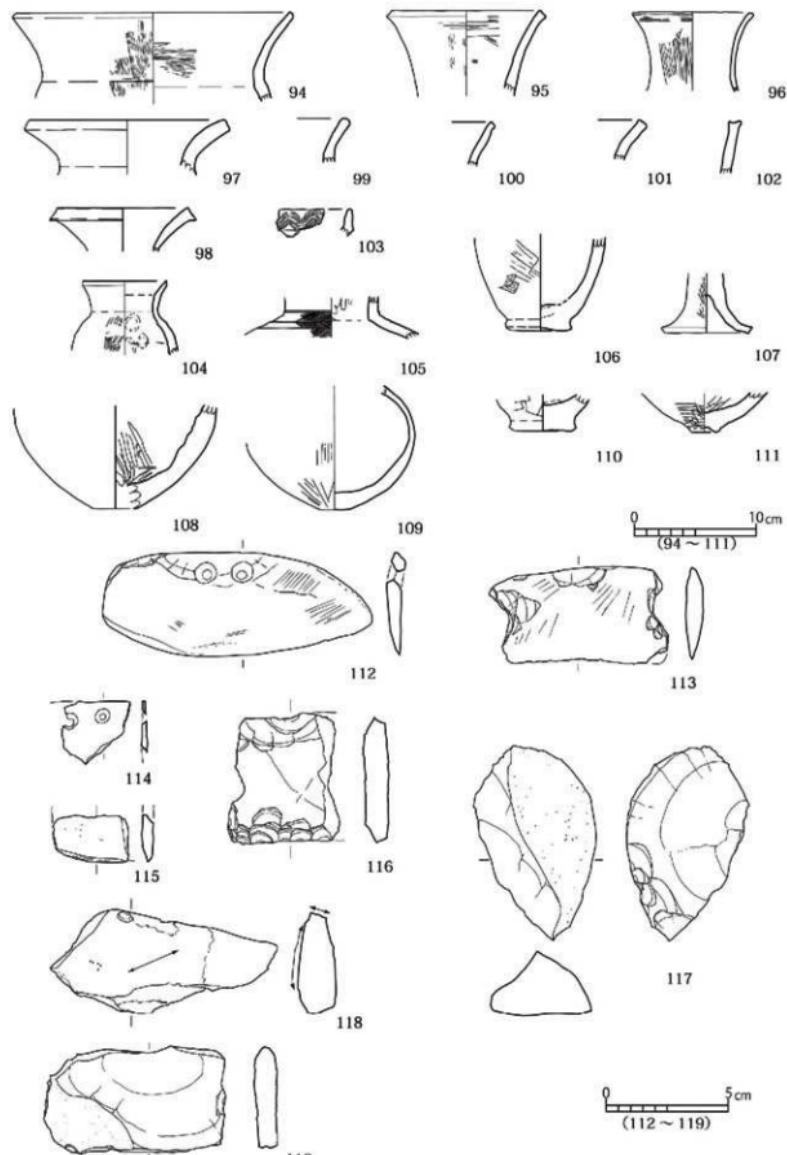


0 10cm

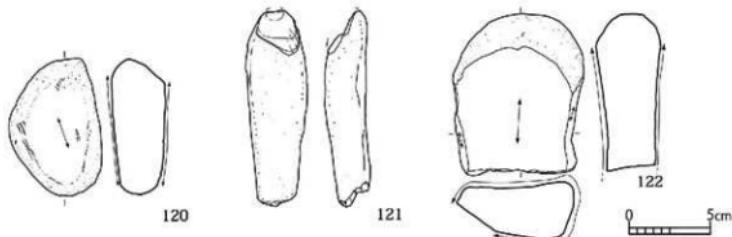
第29図 SA7床面出土遺物実測図1 (1/4)



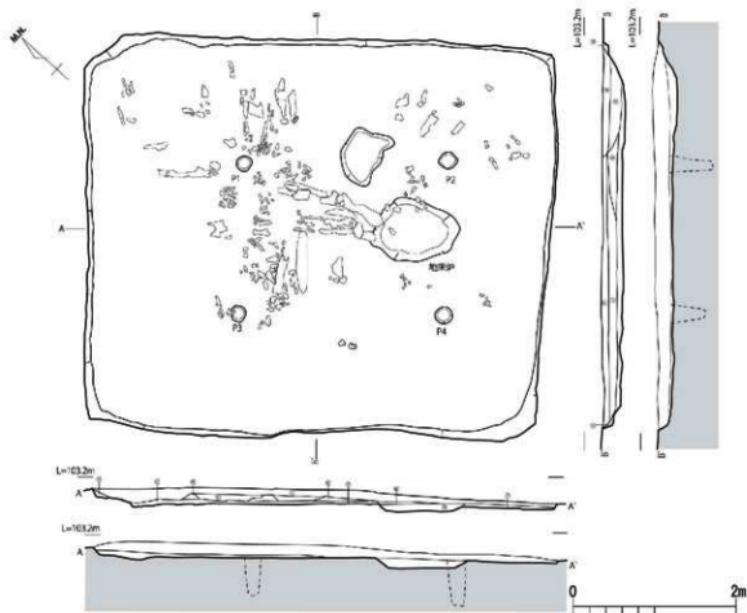
第30図 S A 7床面出土遺物実測図2 (1/2,1/4)



第31図 S A 7 覆土出土遺物実測図1 (1/2,1/4)



第32図 S A 7 覆土出土遺物実測図 2 (1/3)



①褐色土(7.5Y2/1) 粒子細かく、やや粘性あり。K-Ah ブロックを少し含む。②黒褐色土(2.5Y3/1) K-Ah 施を含む。③褐色土(2.5Y2/1) やや粘性あり。K-Ah 施を少し含む。④褐色土(10Y2/1) 粒子細かく、粘性あり。⑤褐色土(10Y1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。⑥褐色土(10Y2/2/1) K-Ah の混合土(6%)しまりが強い。褐化物を含む。⑦褐色土(7.5Y2/1) K-Ah 施を多く含み、炭土化している。炭化物を含む。⑧明茶褐色(5YR5/8) 炭化した K-Ah。黒色土をわずかに含む。⑨暗褐色土(10Y3/3) 黒色土と K-Ah 施が混じる。施上層、炭化物を多く含む。⑩褐色土(10Y2/1) 粘性あり。K-Ah 施を含む。

第33図 S A 8 実測図 (1/60)

S A 8 (第33図～第36図)

【位置】 A-2区K8グリッドに位置する。

【規模】 5.3×4.5 の隅丸方形プランで、壁の残存高は約0.1mである。

【柱穴】 主柱穴は4本である。柱掘り方は0.25～0.3mの円形で、深さは最深のもので床面から0.5mを測る。柱痕跡は認められない。

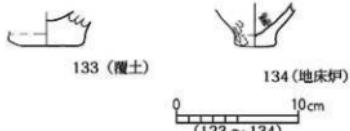
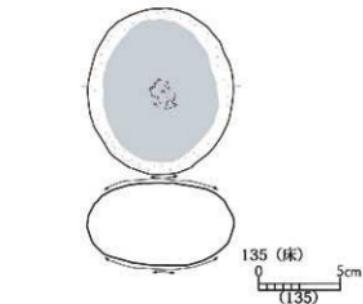
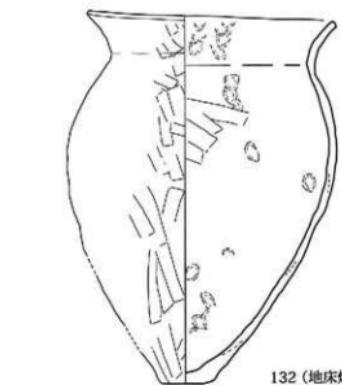
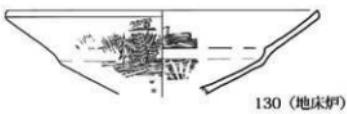
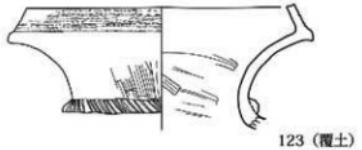
【覆土の状況・炭化材】 覆土は、上部は黒色土が堆積していた。床面の直上には、焼土化したK-Ahがドーナツ状にみられ、その中央部は炭化物を多く含んだ黒色土が堆積していた。焼土の下からは、多

量の炭化材が検出された。炭化材のうち、放射状になっているものもあり、垂木と考えられる。

【床面】 K-Ah粒を含んだ黒褐色土の貼床が施される。中央部よりやや東側で地床炉が検出された。

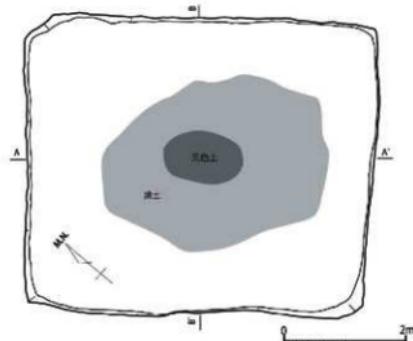
【地床炉】 地床炉は、住居中央部分に検出された。平面形は、 1×0.8 mの楕円形で検出面からの深さ0.1mを測り、断面は皿状をなす。底面付近には焼土層が発達しており、壁面も部分的に被熱による赤変を受けていた。

【出土遺物】 床面からは遺物は少なく、地床炉の覆土からの出土である。

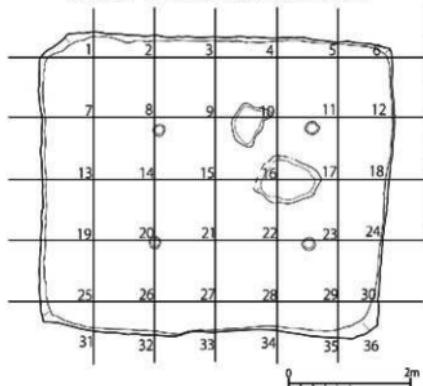


0
(123～134)
10cm

第34図 S A 8出土遺物実測図 (1/3,1/4)



第35図 SA 8 燃土検出状況図(1/80)



第36図 SA 8 フローテーション区割図
SA 9(第37図~第39図)

【位置】A-2区M8グリッドに位置する。北西部分と南東部分が搅乱を受け削平されている。

【規模】4.2×4.3mの隅丸方形プランで、壁の残存高は約0.1mである。

【柱穴】主柱穴は2本である。北側の柱穴は搅乱で半分削平されている。柱掘り方は0.2mの円形で、深さは0.5mを測る。柱痕跡は認められない。

【覆土の状況・炭化材】覆土は、上部はK-Ah粒を含んだ黒色土が堆積し、床面直上には、焼土化したK-Ah粒がみられた。焼土については、セクションベルトのみで確認したため、平面の状況は不明である。南西部分で多量の炭化材が検出された。

多くの炭化材は住居の主軸方向に平行または直交

【フローテーション】1mメッシュを設定し(第36図)、床面直上の土を採取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第6表のとおりである。

第6表 SA 8出土種実同定表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
3	Rubiacae?	アカネ科?	種子	1	
7	Rubiacae?	アカネ科?	種子	5	炭化物片1
8	Rubiacae?	アカネ科?	種子	2	炭化物片5
9	Rubiacae?	アカネ科?	種子	1	炭化物片1
12	Prunus persica Batsch	モモ	核(硬片)	1	炭化物片2
19		不明種実	破片	1	炭化物片4
27	Rubiacae?	アカネ科?	種子	1	炭化物片6
SC2	Rubiacae?	アカネ科?	種子	1	
上部 内		不明植物遺体		1	炭化物片3
123					

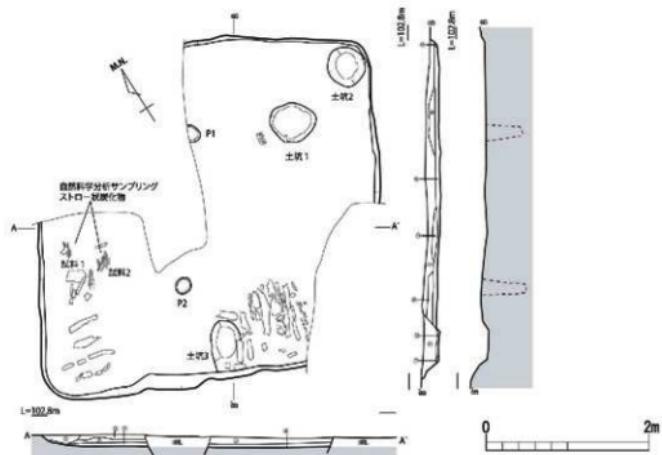
していた。炭化材のなかにはストロー状の炭化物がみられた。この炭化物については、屋根材の可能性があり、どのようなものを使用したか推定するため、植物珪酸体分析及び樹種判定を(株)古環境研究所に分析委託した。詳細については第V章に記載する。

分析の結果、炭化物はメダケ属などのタケ亜科の茎部(葉鞘を含む)という結果が得られた。

【床面】床面は貼床が施され、貼床はK-Ah粒と白色粒を含み、硬化していた。

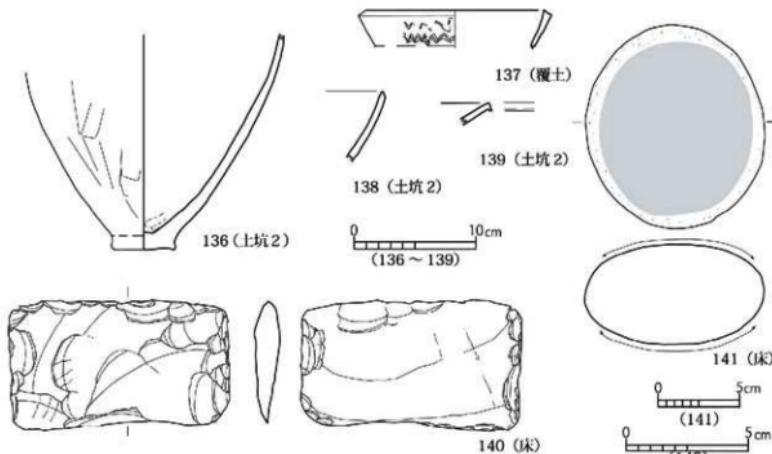
【住居内土坑】土坑が3基検出された。いずれも埋土は黒色土でしまりがない。土坑2の埋土中からは136、138、139が出土している。

【出土遺物】遺構から出土の遺物は、わずかであ



①黒褐色土(10YR2/3)しまりがない。K-Ah 粒をまばらに含む。②黒褐色土(10Y2/1)K-Ah 粒を少し含む。③褐土化した K-Ah と黒褐色土(10YR2/1)層板土? ④黒褐色土(10YR2/1)固くしまる。K-Ah 粒を含む。褐土、白色地をまばらに含む。⑤褐色土(5Y2/1)K-Ah 粒を少し含む。⑥褐色土(5Y2/1)K-Ah 粒を少し含む。やや粘性あり。⑦黒褐色土(10YR3/2)K-Ah 粒を少し含む。赤褐色土(2.5Y3/1)K-Ah のブロックが現する。しまりがない。⑧褐色土(10Y4/4)K-Ah 粒を多く含む。

第37図 S A 9実測図(1/60)



第38図 S A 9出土遺物実測図(1/2, 1/3, 1/4)

る。床面では、住居中央部で数点の上器片が、北東端で石窓丁の未製品(140)が出土した。136は土坑2及び床面から出土の壺の底部であり、この遺物はS A 8から出土した土器片と接合している。

【フローテーション】1mメッシュを設定し(第39図)、床面直上の土を採取し、水洗を実施した。選別された炭化種子の種実同定を行い、結果は第7表のとおりである。

第7表 SA 9出土種実同定表

位置	分類群		部位	個数	備考
	学名	和名			
9	Corydalis	キケマン属	種子	10	昆虫1

SA 10(第40図、第41図)

【位置】 A-2区M 9 グリッドに位置する。北西部分が搅乱を受け削平されている。

【規模】 4.2×4.0の隅丸方形プランで、壁の残存高は約0.1mである。

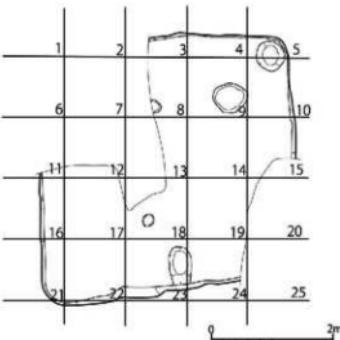
【柱穴】 検出できた主柱穴は1本である。柱掘り方は0.2mの円形で、深さは0.6mを測る。検出された柱穴の位置から北側にもう1本の柱穴が推測され、2本柱であったと考えられる。

【覆土の状況・炭化材】 上部はK-Ah粒を少し含んだ黒褐色土が堆積し、その下には焼土化したK-Ah粒がみられた。焼土化したK-Ahは住居の中央部にみられた。床直上には、しまりのない黒褐色土が堆積している。炭化材は焼土化したK-Ahの下から検出された。SA 8やSA 9とは異なり、炭化材は床面から4~5cm浮いており、住居の主軸方向に直交及び平行する状態で検出された。

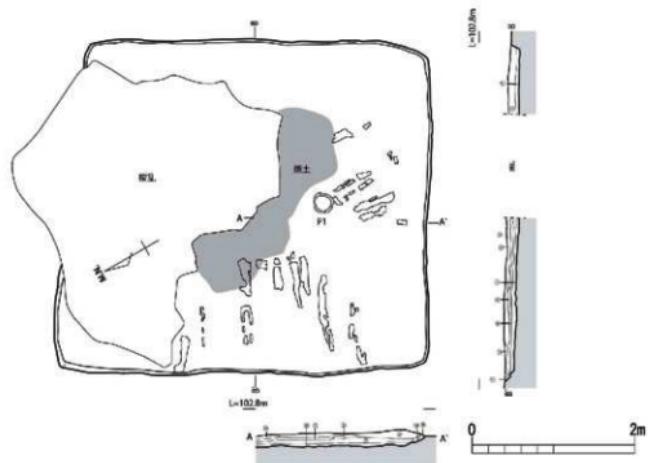
【床面】 床面はK-Ah粒と暗褐色土を含んだ部分とK-Ah粒を含まず暗褐色土と黒色の部分があった。いずれもしまりが強く硬化している。

【出土遺物】 床面から遺物の出土ではなく、すべて覆土中からの出土である。遺物の出土した高さは炭化材と同レベルかそれより高い位置で出土している。

【フローテーション】 他の住居同様、1mメッシュを設定し床面直上の土を採取し、水洗を実施した。しかし、炭化種子は確認されず、炭化物のみであった。

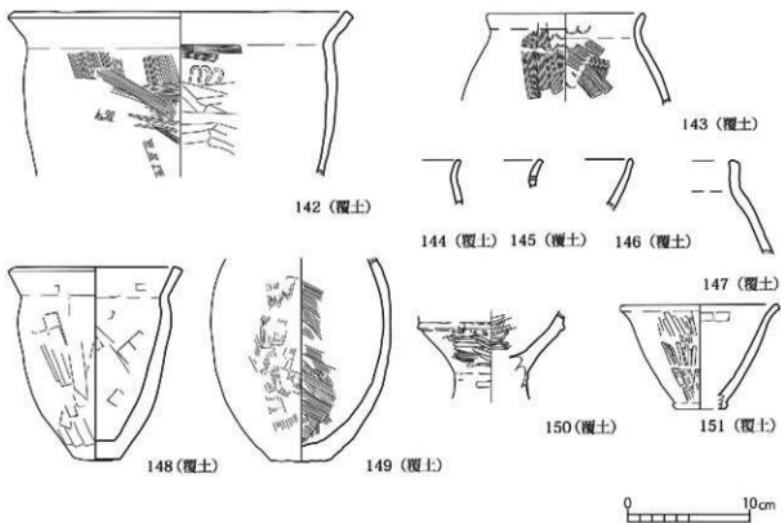


第39図 SA 9フローテーション区割図

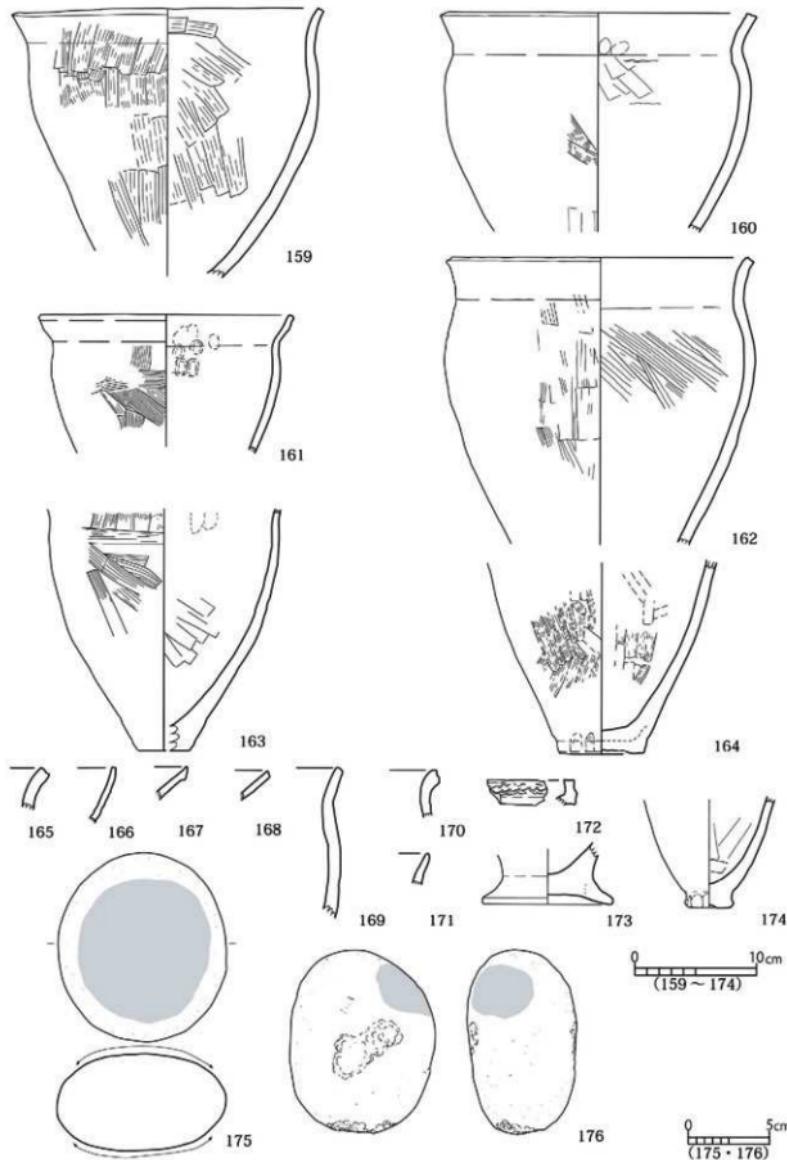


⑤褐色粘土 (10YR3/1) K-Ah 粒を少し含む。しまりがない。⑥褐色土 (7.5Y2/1) しまりがない。やや粘性あり。⑦燒土化した K-Ah と黒色土の混合土 (8.0) ややしまりあり。⑧焼土化した K-Ah と黒色土の混合土 (8.0) ややしまりあり。⑨焼土化した K-Ah と黒色土の混合土 (8.0) 黏化粒が混じる。深褐色粘土 (2.5Y3/1) しまりがなく、粒子が細かい。やや粘性あり。⑩黒褐色土 (2.5Y3/1) K-Ah 粒と暗褐色土を含む。固くしまる。貼床。深黑褐色土 (2.5Y3/1) 黑色土と暗褐色土を含む。K-Ah 粒を含まない。固くしまる。貼床。⑪黒褐色土 (10YR3/1) しまりがない。深黑褐色土 (10YR2/2) しまりがない。

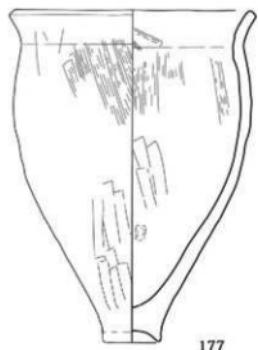
第40図 SA 10 実測図 (1/60)



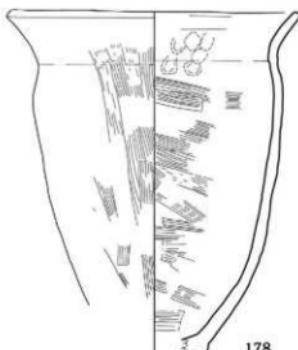
第41図 SA 10 出土遺物実測図 (1/4)



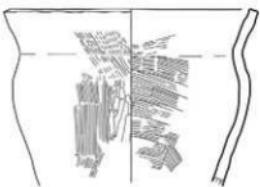
第44図 包含層出土遺物 実測図 (1/3,1/4)



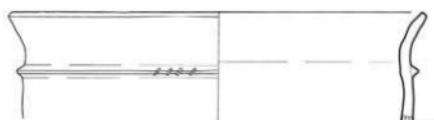
177



178



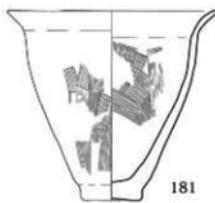
179



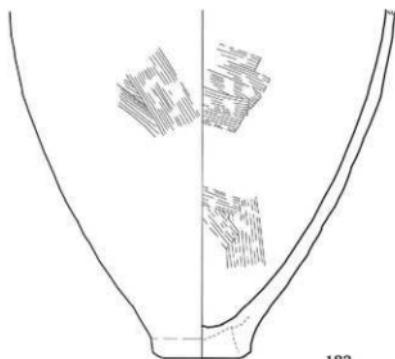
182



180



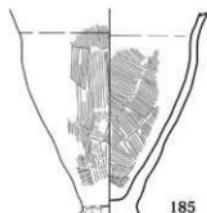
181



183



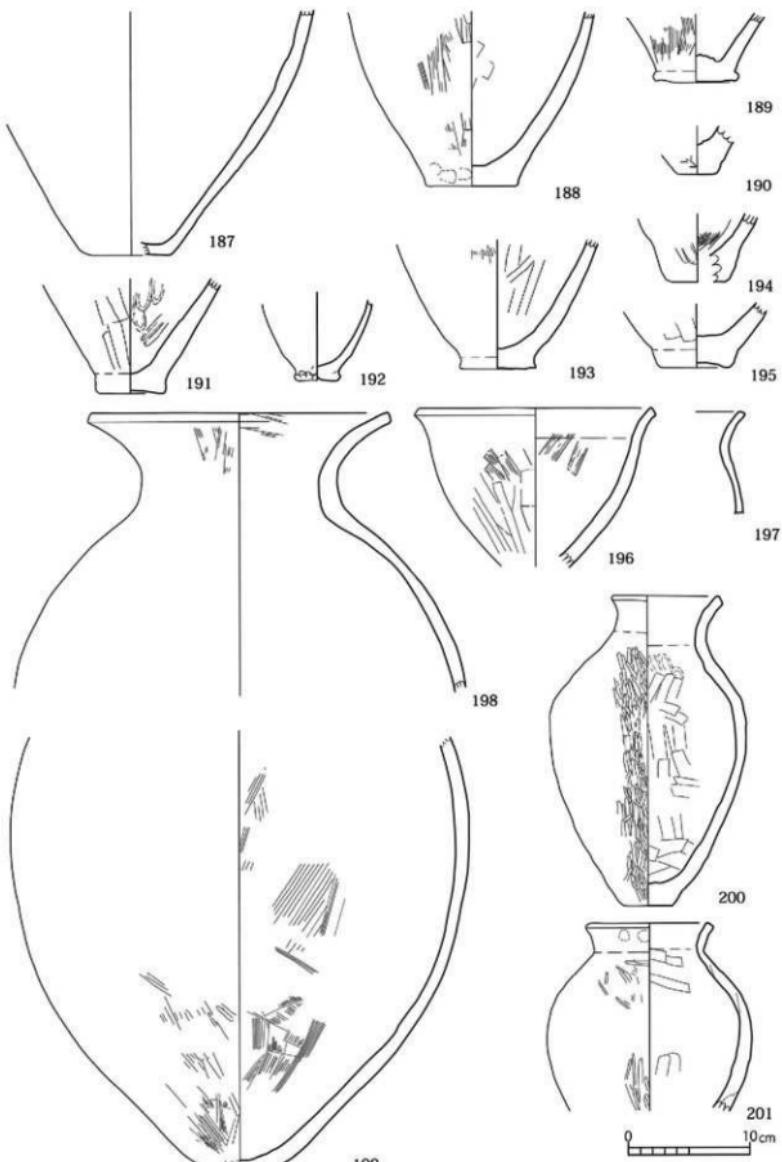
184



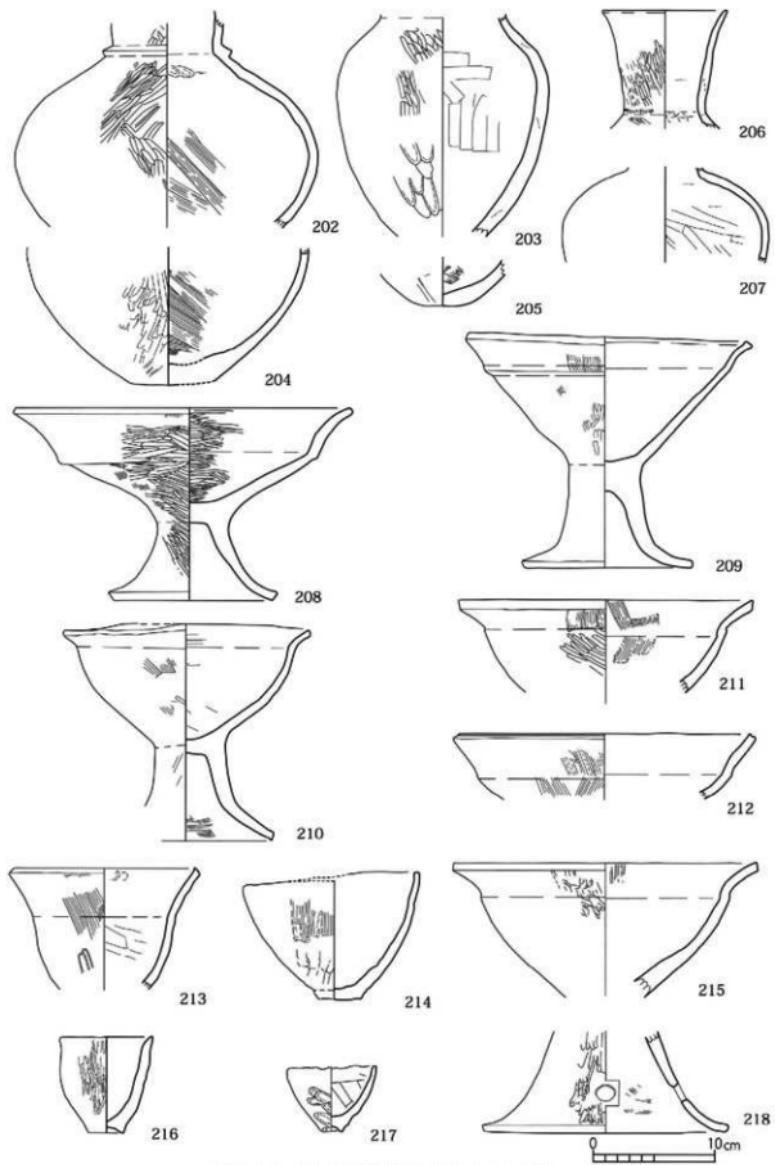
185

0
10cm
186

第45図 撤乱土坑出土遺物実測図1 (1/4)



第46図 搅乱土坑出土遺物実測図2 (1/4)



第47図 摂乱土坑出土遺物実測図3 (1/4)

第8表 弥生土器観察表1

図面番号	出土位置	出土地点	断続	剖面	深さ(c.m.)	手斧・鋤形・文様等		色調		胎土の特徴	構成	備考	結合關係			
						口径	器高	底径	外面	内面						
16	SAS	面土	林	山地部					ナデ	T丸ナデ	紺赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	2mm以下の乳白色、黄褐色を含む。	良好	外側にススが付着	
17	SAS	面土	林	北部					底面	斜め方向の工具ナデ 鐵、斜め方向の工具ナデ	灰、斜め方向の工具 (10Y3/1)	黒褐色 (10Y3/1)	4mm以下の灰白色、灰黃色。2mm以下の黒褐色を多く含む。黒褐色を透かす状況を含む。	良好	内側酸化風化膜、内面に炭化物付着	
18	SAS	面土	苔	山地部					ミガキ	ミガキ	黑色(1.5f)	黑色(1.5f)	2mm以下の灰白色を含む。	良好		
20	SAS	面土	林	山地部					ミガキ	T平なナデ	黑色(1.5f)	暗色(SYB6/6)	2mm以下の白色、薄色を少し含む。1mm以下の黒褐色をごくわずかに含む。	良好		
21	SAS	面土	林	北部					DAB	斜め方向の工具ナデ 鉄ナデ	紺褐色 (10Y3/6)	明褐色 (10Y3/6)	1mm以下の黄褐色を少し含む。	良好		
22	SAS	土坑1	良	底部					DAB	風化が著しく表面小孔 ナデ	淡褐色 (10Y8/8)	淡褐色 (10Y8/8) 黑色 (5Y2/1)	2mm以下の灰白、乳白色を多く含む。	良好	内側風化	
23	SAS	HE	苔	新井					(13-4)	圓方向のハケ目 ナデ、表面風化	褐色(7.5Y3/2) にぶい褐色 (10Y3/4)	褐色(7.5Y3/2) にぶい褐色 (10Y3/4)	2mm以下の風化、板状化。1mm以下の黒褐色、白色風化斑、黒色透明白色風化を含む。	良好		
24	SAS	面土	苔	山地部 -削面	(30.0)				圓方向のハケ目	板状内の工具ナデ	褐色(10Y3/7) にぶい褐色 (5Y2/6)	明褐色 (10Y3/7)	1~3mmの灰白色を多く、1~2mmの灰白色を少しあわせた褐色を少しあわせた。	良好	外側にスス付着	SAT
25	SAS	土坑	良	口地部 -削面	(23.0)				口縁斜方のナデ ナデ、斜方内のハケ目	板状内のハケ目、斜方内のハケ目	褐色(5Y6/8) にぶい褐色 (5Y5/4)	褐色(5Y6/8) にぶい褐色 (5Y5/4)	1mm程の灰白色を多く、2mm程にぶい褐色を含む。	良好	外側スス付着	SAT
26	SAS	土坑	良	口地部 -削面	13.3				口背斜方のナデ ナデ、斜方内のハケ目	板状内のハケ目、斜方内のハケ目、斜方背斜方のナデ	にぶい褐色 (10Y3/7) 黑褐色 (2.5Y3/1)	天青色 (2.5Y7/2) 黑褐色 (2.5Y3/1)	1mm程の灰白色を多く、1mm以下の灰白色、黑褐色を少しあわせた。	良好	内側黒変	
27	SAS	面土	苔	口地部					口縁斜面に垂直波状 文、斜め方向のハケ 目	板状内のハケ 目	紺赤褐色 (5YR5/6)	明褐色 (5YR5/6)	1mm以下の白褐色をごくわずかに含む。	良好	外側にスス付着	
28	SAS	面土	林	山地部					口沿部ナデ、斜方 背斜方ハケ目	板状内のハケ 目	にぶい褐色 (5YR5/6)	にぶい褐色 (5YR5/6)	2mm以下の灰白、にぶい褐色を少しあわせた。	良好		
29	SAS	面土	苔	新井					鐵、斜め方向のハ ケ目、新井	鉄ナデ	紺褐色 (10Y3/1)	明褐色 (10Y3/6)	4mm以下の灰褐色、2mm以下の白色を少しあわせた。	良好	外側に円弧の 縦目	
30	SAS	面土	苔	口地部 -削面	(26.7)				斜方のナデ	斜め方向のハケ目	天青色(5Y4/2)	天青色(5Y4/2)	7mm以下の灰白色を含む。	良好	外側にスス付 着	
31	SAS	面土	苔	口地部 -削面	後方				口縁斜方のナ デ、黒いハケ目	ナデ	紺褐色 (10Y3/6)	にぶい褐色 (10Y3/6)	1mm以下の灰白色、黒褐色、半透明性を少し含む。	良好	縫合に空孔	

第9表 弥生土器觀察表2

図面 番号	出土 位置	出土 地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調物・文様等		色調		船上の特徴	焼成	備考	接合部様
					口径	底面	深度	外面	内面	外面	内面				
32	SAS	床	山	底盤		(3.5)		ナゲ、折ナゲ	ナゲ	明黄褐色 (10YR7/8)	利黄褐色 (10YR7/8)	1~3mmの白色斑を多く含む。	良好		
33	SAS	床	裏	底盤		3.6		竪方向のハケ目、ナ ゲ	竪方向のハケ目、折 底盤	明黄褐色 (2.5Y5/2)	にぶつ黄褐色 (10YR7/4)	1~3mmの淡白色斑を多く含む。 1~2mmの白色斑を少し含む。 1mm程の淡白色斑を少し含む。	良好		
34	SAS	底土	裏	折底～ 底盤		底盤		竪方向のハケ目、底 部に互押さえ	ナゲ	褐色 (5YR8/6)	褐色 (7.5YR7/4)	1~4mmの褐色を多く含む。 2~3mmの褐色を少し含む。 2~3mmの淡白色斑を少し含む。	良好	外底底度	
35	SAS	床	裏	折底～ 底盤		底盤		竪方向のハケ目	ナゲ	浅黃褐色 (10YR7/9) 黑色 (10Y2/1)	灰黑色 (2.5Y7/2) 黑 (3Y5/1)	2~3mmの淡褐色。灰 白色斑を多く含む。	良好	外底底度、内 底に炭化物付 着	SAS-圓 底2
36	SAS	底土	西坪	底盤				竪方向のハケ目、底 部にハケ目の中核部分 のナゲ	ナゲ、底部竪方向の ナゲ	にぶつ黄褐色 (10YR7/8)	にぶつ黄褐色 (10YR8/4)	1~2mmの褐色、黑色 斑を多く、1mm以下の 褐色斑を少し。 2mm以下の灰褐色をわずかに 含む。	良好		
46	SAS	底土	裏	口縁部				竪方向のハケ目の中 核部分のナゲ	竪方向のハケ目の中 核部分のナゲ	明黄褐色 (5Y 2/5/6)	褐色 (7.5YR8/6)	1~4mmの褐色を多く含む。 1~2mmの灰褐色を少し含む。	良好	外底一部底度	
47	SAS	底土	裏	口縁部				口縫痕横方向のハケ 目のナゲ、剖面 め方向のハケ目のち 核部分のナゲ	口縫痕横方向のハケ 目のナゲ、剖面 め方向のハケ目のち 核部分のナゲ	にぶつ黄褐色 (10YR7/4)	灰黄色 (10YR5/2)	1~2mmの白色、褐色 斑、1mm以下の白色斑 を多く含む。	良好	内底底度	
48	SAS	底土	裏	口縁部				丁字ナゲ、口縫痕 剖面方向のナゲ	裏方向のナゲ	にぶつ黄褐色 (2.5Y4/6)	灰黄色 (2.5Y1/4)	1mm程の白色斑を少し 含む。	良好		
49	SAS	床	裏	口縁部				口縫痕横方向のハケ 目のち核部分のナ ゲ、横方向のハケ目	横方向のハケ目 のナゲ	にぶつ黄褐色 (10YR8/4)	褐色 (7.5YR8/6)	1~2mmの褐色斑を少 し、2mm程の白色斑を わずかに含む。	良好		
50	SAS	裏土	裏	口縁部 ～底盤	25.4			口縫痕横方向のナ ゲ、底盤以下横方向 のハケ目	横方向のハケ目、底 盤、底盤以下横方 向のハケ目	褐色 (7.5YR7/8) 黑色 (2.5Y2/1)	褐色 (7.5YR7/8)	0.5~2mmの乳白色 斑を多く、1mm程の灰 褐色斑を少し含む。	良好	外底底部下半 部火候着	
51	SAS	床	裏	口縁部	34.0			口縫痕横方向のナ ゲ、横方向のハケ目 の中核部分のナ ゲ	横、横方向のハケ 目	褐色 (7.5YR8/8)	褐色 (7.5YR8/8)	1~3mmの白色斑を多 く、1~2mmの白色、 褐色斑を少し。 1mm程の褐色斑をわずか に含む。	良好	内底一部底度	
52	SAS	土壤2	裏	口縁部 ～底盤	122	39.3	6.8	竪方向のハケ目、ナ ゲ	横、横方向のハケ目、 工具ナゲ	にぶつ黄褐色 (5YR7/9)	黑色 (2.5Y1/2)	1~2mmの乳白色斑を 多く、1~2mmの灰白 色斑を少し含む。	良好		
53	SAS	床	裏	底盤				横方向のハケ目 の中核部分のナ ゲ、剖面底化のため 一部ハケ目のち 核部分	横方向のハケ目、折 底盤	褐色 (7.5YR6/8)	褐色 (5YR6/8)	1~3mmの白色斑を多く 含む。 1~2mmの白色、 褐色斑を少し。 2~3mmの灰褐色をわずか に含む。	良好		
54	SAS	床	西坪	底盤				竪方向のハケ目	底盤	にぶつ黄褐色 (10YR7/2)	にぶつ黄褐色 (10YR7/8)	1mm程の灰白色斑を 多く含む。	良好		
55	SAS	床	裏	口縫痕 ～底盤	9.2			口縫痕横方向のナ ゲ、剖面底化のため 一部ハケ目のち 核部分	口縫痕ナゲ、剖面横 方向のハケ目、底盤 底盤	明黄褐色 (10YR7/8)	にぶつ黄褐色 (10YR7/8)	1mm程の灰白色斑を多 く、2mm程の乳白色斑、 1~3mmの白色斑を少 し含む。	良好		

第10表 弥生土器観察表3

回数 番号	出土 位置	出土 地点	断面 形状	剖面 寸法 縦幅 横幅 厚度	伝量 (cm)		手法・形態・文様等		色調		胎土の特徴	済成	備考	接合面積	
					外側	内側	外側	内側	外側	内側					
56	SAT	床	直	側面-直角			(4.8)	1ガキ	ナゲ	に赤い黄褐色 (DGYR6/4) 離灰 色(DYR94/3)	に赤い黄褐色 (DGYR6/4) 離灰 色(DYR94/3)	2~4mmの白色粒、 2mm粒の褐色粒を含 む。	良好		SAT
57	SAT	床	直	直角			(6.6)	丁寧なナゲ	工具ナゲ	に赤い黄褐色 (DGYR6/4)	に赤い黄褐色 (DGYR6/4)	1mm粒の白色粒を含 む。	良好		
58	SAT	陶土	直	直角			(8.6)	ナゲ	ナゲ、側面凹	に赤い赤褐色 (DSYR2/4)	黒褐色 (DSYR1/1)	1~3mmの白色粒、1~ 2mmの褐色粒を多く、 2mm以下の灰褐色 を少し含む。	良好	外側黒度	
66	SAT	床	直	L型底 ~靴形	(25.2)	(26.8)	5.3	圓、斜め方向のハケ 口、L底部ハケ口の ナゲ	L底部ハケ口のナ ゲ、丁寧なナゲ	蛇色 (DSYR2/9)	に赤い黄褐色 (DGYR6/4)	1~2mmの桃系的色調 を多く、1mmの灰白色。 褐色粒を少し含む。	良好	外側スス付赤	
67	SAT	床	直	L型底 ~靴形	(23.9)	26.4	4.0	圓方向のハケ口	斜め方向のハケ口、 ナゲ	黒褐色 (DGYR2/6)	黒褐色 (DGYR1/3)	1~2mmの灰白色、褐色 を多く含む。	良好	外側スス付赤	
68	SAT	床	直	側面-直角			(5.0)	圓方向のハケ口、斜 め方向記述、斜め方 向の2ガキ	斜め方向のハケ口、 斜め方向記述、斜 め方向の2ガキ	に赤い褐色 (DSYR5/4)	に赤い褐色 (DSYR2/1)	1~2mmの桃色點を 多く、1~2mmの褐色 点を少し含む。	良好	内外側黒度	SAT
69	SAT	床	直	L型底 ~靴形	(20.0)			L底深模方向のナ ゲ、旋回方向のハケ 口	L底深模方向のナ ゲ、工具ナゲ、側面 凹	に赤い褐色 (DSYR5/1)	に赤い褐色 (DSYR5/0)	1~3mmの乳白色點を 含む。	良好	外側スス付赤	
70	SAT	床	直	L型底 ~靴形	(21.0)			L底深模ナゲ、斜め 方向のハケ口	斜め方向のハケ口、斜 め方向記述	黒褐色 (DSYR7/0)	黒褐色 (DSYR6/0)	1~2mmの褐色、白色 粒を多く、1~5mmの 褐色粒を少し含む。	良好	外側黒度	
71	SAT	床	直	L型底 ~靴形	14.8	29.6	5.9	圓部-底部えり、斜 め側面凹	圓部-底部えり、斜 め側面凹	に赤い褐色 (DSYR6/4)	に赤い黄褐色 (DGYR6/3)	1~2mmの褐色、白色 粒を多く、1mm以 上の褐色斑が現れる。 褐色斑をわずかに含む。	良好	側面斑有り	
72	SAT	床	直	L型底 ~靴形	8.8	21.2	2.7	不定方向の2ガキ	L底深模方向のナ ゲ、斜め方向の2 ガキナゲ、斜面凹	浅褐色 (DSYR8/6)	褐色 (DSYR7/0)	1~3mmの白色粒を多 く含む。1~2mmの褐 色粒を含む。	良好	外側、底面凹 近赤面、側面 銀有り	
73	SAT	床	直	側面-直角			(2.4)	圓方向のハケ口、斜 め方向の工具ナ ゲ、側面凹	圓方向の工具ナ ゲ、側面凹	に赤い褐色 (DSYR6/6)	に赤い褐色 (DSYR7/3)	1~4mmの紅褐色、 1mm粒の乳白色。に 赤い褐色色點を多く、 1mm以下の無色透明 点を少し含む。	良好		
74	SAT	床	直	L型底 ~靴形	(10.0)			L底深模ナゲ、側面 氧化化のため誤認不可	工具ナゲ、側面凹	に赤い黄褐色 (DGYR7/0)	に赤い黄褐色 (DGYR7/0)	1mm粒の乳白、褐色 を多く含む。	良好	内側黒度	
75	SAT	床	直	L型底				C斜面に凹側凹	前方方向のハケ口	に赤い褐色 (DSYR6/6)	褐色 (DSYR7/1)	1mm粒の乳白、褐色 を多く含む。	良好	内外側黒度が 差しい	
76	SAT	床	直	L型底				風化のため誤認不可	前方方向のハケ口	褐色 (DSYR7/6)	褐色 (DSYR6/6)	1~3mmの白色粒を多 く、2mmの褐色斑をわ ずかに含む。	良好	内外側黒度 化している	
77	SAT	床	直	L型底				ナゲ	ナゲ	純灰色 (DGYR4/1)	黒褐色 (DSYR7/0)	1mm粒の灰白、褐色 を多く含む。	良好	内側黒度	

第11表 弥生土器観察表4

番号	出土 位置	出上 地點	測量	剖面	法線(c.m.)		手法・調査・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	備考	検査実績	
					上位	下位	幅	高さ	底径	外面	内面				
78	SA7	床	横	口縁部						褐色(5YR6/9)	褐色(7.5YR6/9)	1~2mmの白色斑を多く、1~2mmの黒色斑を少し含む。	良好		
79	SA7	壁土	高坪	1.5m部						褐色(7.5YR6/9)	褐色(10YR6/9)	1mm以下の赤褐色。乳白色斑を少し含む。	良好		
80	SA7	床	横	口縁部 ~底部	10.2					褐色(7.5YR6/9)	褐色(10YR6/1)	2mm以下の暗褐色。深褐色。灰白色。に多い褐色斑。底部は無色斑を含む。	良好		SM
81	SA7	床	小窓	口縁部 ~底部	7.5	7.5	2.7			褐色(7.5YR6/9)	褐色(7.5YR6/9)	3mm以下の暗灰色。2mm以下の赤褐色。1mm以下の乳白色斑を含む。	良好		
82	SA7	床	高坪	井底	30.8					褐色(5YR6/9)	褐色(7.5YR6/9)	1~3mmの赤褐色を多く、1~2mmの白色斑を含む。1~2mmの黒色斑を少し。1~4mmの褐色斑をわずかに含む。	良好		
83	SA7	床	腰台	腰部 ~底部	22.7	15.8	21.1			褐色(5YR6/9)	褐色(5YR6/9)	1~7mmの赤褐色。1~2mmの乳白色斑を多く含む。	良好	内側一帯黒斑、上部浮見ヒ素鉄通	
84	SA7	床	高坪	腰部			(14.4)			褐色(7.5YR6/9)	褐色(7.5YR6/9)	1~3mmの赤褐色。白色。1~2mmの白色斑を多く、3mmの黒色斑をわずかに含む。	良好	内側一帯黒斑	
85	SA7	床	高坪	腰部			(14.6)			褐色(10YR6/1)	褐色(10YR6/1)	1mm以下の乳白色。褐色斑を多く含む。	良好		
86	SA7	床	高坪	腰部						褐色(7.5YR6/9)	褐色(10YR6/9)	1mm弱の乳白色。白色。褐色斑を多く含む。	良好		
87	SA7	柱穴	高坪	腰部						褐色(10YR7/3)	褐色(2.5YR7/2)	2mm弱の赤褐色。1~2mmの白色斑を多く含む。	良好	内側黒斑	
88	SA7	床	横	腰部 ~底部			3.8			褐色(10YR7/9)	褐色(10YR7/4)	1~3mmの乳褐色を多く含む。	良好		
89	SA7	床	横	底部			4.0			褐色(7.5YR6/2)	褐色(2.5YR6/1)	1~2mmの乳白色。白色。白色斑を多く含む。	良好	内側黒斑	
94	SA7	腰台	横	口縁部	22.4					褐色(7.5YR6/4)	褐色(7.5YR6/4)	1~3mmの赤褐色。白色斑を多く含む。1mmの白色斑を多く、1mmの褐色斑を少く含む。	良好	内側黒斑	
95	SA7	腰上	横	口縁部 ~底部	12.2					褐色(7.5YR6/6)	褐色(7.5YR6/6)	1~3mmの赤褐色を多く。1~3mm褐色。黑色斑を少し。1~3mmの白色斑をわずかに含む。	良好		
96	SA7	腰上	横	口縁部 ~底部	9.8					褐色(10YR6/9)	褐色(10YR6/9)	1~3mmの褐色を多く含む。	良好		

第12表 弥生土器観察表5

器番 番号	出土 位置	出土 地點	器種	部位	法寸 (cm)		手法・説明・文様等		色調		埴土の特徴	焼成	備考	総合評価			
					上口	下口	器高	底径	外面	内面							
97	SAT	埴土	直	口縁部	(16.0)				横方向の工具ナゲ	工具ナゲ	灰褐色 (7.5YR5/2)	褐色 (10YR4/3)	1mm以下の乳白色、褐色を多く含む。1mm以下の白色を少し含む。	良好			
98	SAT	埴土	直	口縁部	(10.8)				横方向の工具ナゲ	横方向の工具ナゲ	褐色 (7.5YR7/8)	深褐色 (7.5YR8/8)	1mm厚の灰白。褐色を多く、2mm厚の乳白色を少し含む。	良好			
99	SAT	埴土	直	口縁部					ナゲ	ナゲ、斜押さえ	褐色 (7YR6/4)	褐色 (5YR6/9)	1mm厚の乳白色、灰白色を多く含む。	良好			
100	SAT	埴土	直	口縁部					ミガキ、ナゲ	ミガキ、ナゲ	に高い褐色 (10YR6/9)	に高い褐色 (10YR7/9)	1~2mmの乳白色、褐色を多く、2~3mmの白色、褐黄色を少しきむ。	良好			
101	SAT	埴土	直	口縁部					ナゲ、斜押さえ	横方向のハケ目	に高い褐色 (7.5YR7/6)	に高い高褐色 (10YR7/6)	1~2mmの灰白、褐色を少しきむ。	良好			
102	SAT	埴土	直	口縁部					口縁部横方向のナ ゲ、ナゲ	ナゲ	に高い灰褐色 (10YR7/4)	に高い褐色 (7.5YR7/4)	1mm厚の乳白、赤褐色を少し含む。	良好			
103	SAT	埴土	直	口縁部					導出状況、横ナゲ	工具ナゲ	褐色 (10YR4/1)	褐色 (7.5YR7/6)	1~3mmの深褐色を少しきむ。	良好			
104	SAT	埴土	直	口縁部～底部	(4.8)				口縁部横方向のナ ゲ、側底部ガネ	ナゲ、斜壓痕	黒 (2.5Y2/1)	深褐色 (2.5Y4/1)	1~2mmの灰白、乳白、赤褐色を多く含む。	良好	外表面黒度		
105	SAT	埴土	直	底部					ミガキ、沈殿	工具ナゲ	に高い灰褐色 (10YR7/9)	褐色 (2.5YH5/1)	1mm厚の灰白、褐黄色を多く含む。	良好			
106	SAT	埴土	直	底部～ 底部					B底 埋、斜め方向のハ ケ目、斜底付近部ナ ゲ	ナゲ	に高い灰褐色 (10YR7/9) 褐色 (2.5YH5/1)	に高い高褐色 (7.5YR7/9)	2mm以下の褐色、1mm以下の白色を多く含む。	良好	外表面黒度	SAT-A 良2	
107	SAT	埴土	高环	底部					6.5	ミガキ	ナゲ	褐色 (5YR6/4)	深褐色 (2.5Y3/2)	1~2mmの白色、褐褐色を分け。	良好	外表面黒度	
108	SAT	埴土	直	斜底～ 底部					溝などのため剥落不規	工具による削いナゲ	褐色 (7.5YR7/8)	に高い高褐色 (7.5YR7/6)	1mm厚の乳白、灰白、褐色を多く含む。	良好	外表面黒度		
109	SAT	埴土	直	斜底～ 底部					横方向のハケ目のち りとガネ、底側斜面に上 げ字	ナゲ	褐色 (5YR6/4) 褐色 (2.5YH5/1)	に高い褐色 (7.5YR6/4)	1~3mmの深褐色、1~2mmの深褐色を多く、1mmの白色を少しきむ。	良好	外表面黒度		
110	SAT	埴土	直	底部					4.8	工具ナゲ	斜底	褐色 (10YR5/4)	褐色 (10YR3/4)	1~3mmの乳白色、褐色を多く含む。	良好		
111	SAT	埴土	直	斜底～ 底部					口底 横方向のミガキ	T工具ナゲ	に高い灰褐色 (10YR7/9)	に高い褐色 (7YR6/6)	1~3mmの深褐色を多く含む。1~2mmの褐黄色を少し含む。	良好	鉢土削り、 外表面黒度		

第13表 弥生土器観察表6

番号	出土 場所	出土 地質	層相	部位	法縦 (cm)	手法・模様・文様等		色調		出土の特徴	損成	備考	後合面側	
						外縦	内縦	外縦	内縦					
123	SAB	埋土	底	口縁部 ～底部	21.3	適合した複数のハケ目 （次に、頭頂部に複数の ハケ目、手の内側に複数の ハケ目、頭頂部に複数の ハケ目）	毛刃手	毛刃手	褐色 (7.5YR7/8) 暗褐色 (7.5YR7/9)	褐色 (7.5YR7/8) 暗褐色 (7.5YR7/9)	1~3mmの白色、黄色 色、1mm以下の黒色點 を多く、1~2mmの褐色 色點を少し含む。	良好	外縦一端黒化	
124	SAB	埋土	底	口縁部			毛刃手	毛刃手	に赤い斑様色 (10YR7/8)	に赤い斑様色 (10YR7/9)	1mm以下の乳白色點を 含む。	良好		
125	SAB	埋土	底	口縁部		ハケ目の各ナメ	頭方向のハケ目	頭尾色 (10YR3/1)	頭尾色 (10YR4/2)	2mm以下の褐色、に赤 い褐色を少し含む。	良好	外縦スジ有		
126	SAB	埋土	底	口縁部		丁寧なナメ	丁寧なナメ	灰褐色 (10YR5/7)	灰白色 (10YR8/7)	1mm以下の褐色色點を 含む。	良好			
127	SAB	埋土	底	口縁部		丁寧なナメ	丁寧なナメ	灰褐色 (10YR8/8)	灰白色 (10YR8/9)	1mm以下の褐色色點を 含む。	良好			
128	SAB	埋土	底	口縁部		工具ナメ	工具ナメ	黄褐色 (2.5YR5/1)	黄褐色 (2.5YR5/1)	1mm以下の褐色色點を 含む。	良好			
129	SAB	埋土	底	口縁部		鉛文字、ナメ	鉛ナメ	に赤い斑様色 (10YR7/6)	に赤い斑様色 (10YR7/9)	1mm以下の褐色色點を わずかに含む。	良好			
130	SAB	底	基床	内部	(25.4)	上部底、吸水方向の ハケ目、下部ハケ目の 立ち上がり	上部底方のハケ 目、下部ハケ目の立 上がり	に赤い斑様色 (10YR7/8)	に赤い斑様色 (10YR7/9)	1~2mmの乳白、褐色 色點を含む。	良好	外縦スジ 付着		
131	SAB	埋土	底	斜面～ 底面		ハケ目の立ち上がりの ミガキ、底部付近ケ ズリ	立め方向のハケ目	に赤い斑様色 (10YR7/6)	に赤い斑様色 (10YR6/3)	1mm粒の乳白、褐色點 を含む。	良好			
132	SAB	底、地 底部	底	口縁部 ～底部	20.0	30.1	3.4 工具ナメ	二段ナメ、粗面擦	浅褐色 (10YR8/8)	浅褐色 (10YR8/9)	1~2mmの赤褐色、赤 色、黒褐色を非常に 多く含む。	良好	外縦スジ有	
133	SAB	埋土	底	底部			工具ナメ	ナメ	褐色 (5YR8/9)	褐色 (5YR8/9)	1~2mmの乳白、黑色點 を多く含む。	良好	外縦黒化	
134	SAB	地中	小底	底部			鉛ナメ、ナメ	頭方向のハケ目	褐褐色 (7.5YR6/4)	褐褐色 (7.5YR6/4)	3mm以下の乳白色、 2mm以下の褐色色點を含 む。	良好		
135	SAB	上部2	底	斜面～ 底面	4.9	黒化のためはっきり しないが、工具ナメ 底面有	黒化のため頭部近ナメ、 底面有	褐色 (7.5YR7/6) 暗褐色 (10YR7/9)	褐色 (7.5YR7/6) 暗褐色 (10YR7/9)	1~7mmの乳白色、1~ 2mmの褐色色點を多 く、1~3mm褐色、 1mm以下の灰色色點を 少し含む。	良好		SAB	
136	SAB	埋土2	底	口縁部	(14.5)		工具ナメ、擦痕消去 文	頭尾色 (2.5YR8/3)	頭尾色 (2.5YR8/3)	1mm以下の乳白色點を 含む。	良好			
137	SAB	埋土2	2R	口縁部			口唇部擦ナメ、毛刃 手	毛刃手	新褐色 (10YR7/6)	新褐色 (10YR8/4)	1mm粒の灰白、乳白色 色點を少し含む。	良好		

第14表 弥生土器観察表7

区画 番号	出土 位置	出土 地点	器種	部位	法量 (cm)		手法・調整・文様等		色調		出土の特徴	既成	備考	総合判断	
					口径	底面	底径	外面	内面	外面	内面				
139	SA9	土坑2	鉢	口縁部				口縫部斜ナデ、ミガ ナ	底、傾く方向のハケ 目	黒褐色 (3.0YR3/2)	灰褐色 (10YR4/2)	3mm以下の褐色色點を 含む。1mm程の黒褐色 點を少し含む。	良好		
142	SA10	埋土	瓶	口縁部 ～底部	27.0			口縫部傾方向のナ デ、底膨張方向のハ ケ目、側縫線、側め 方のハケ目	口縫部斜方向のナ デ、底膨張方向のハ ケ目、側縫線、側め 方のT形ナデ	に近い褐色 (7.5YR6/4)	に近い黄褐色 (10YR6/4)	3mm以下の浅黄褐色、 1mm以下の黒褐色點を 含む。	良好		埋凡1 + 埋凡2
143	SA10	埋土	瓶	口縁部 ～底部	13.6			口縫部ナデ、側め方 向のハケ目、斜井さ え	口縫部ナデ、側め方 向のハケ目、斜井さ え	に近い黄褐色 (10YR6/4)	に近い黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の褐色、淡黃 褐色を含む。	良好		
144	SA10	埋土	瓶	口縁部				工具ナデ、ナデ、 ナデ	口縫部傾方向の二重 ナデ、ナデ、ナデ	に近い黄褐色 (10YR7/4)	に近い黄褐色 (10YR7/4)	2.5mm以下の赤褐色、 1mm以下の褐色色點を 含む。	良好		
145	SA10	埋土	瓶	山根部				ナデ、穿孔あり	ナデ	に近い褐色 (3YR7/9)	に近い褐色 (3YR7/6)	1mm以下の褐色、褐黃 色、白褐色、青褐色の 色點を少し含む。	良好		
146	SA10	埋土	瓶	瓶部				工具ナ	工具ナ	に近い黄褐色 (10YR6/4)	に近い褐色 (7.5YR6/4)	3mm以下の赤褐色、 1mm以下の褐色色點を 含む。	良好		
147	SA10	埋土	瓶	口縁部 ～底部				口縫部傾方向のナ デ、二三ナデ、瓶左 側のハケ目	工具ナデ、斜井 部	に近い黄褐色 (10YR7/4)	に近い褐色 (7.5YR6/4)	1mm程の乳白色、褐色 色點を多く含む。	良好		
148	SA10	埋土	瓶	山根部 ～底部	14.2	15.8	38	LH縫合ナデ、工具ナ デ	LH縫合ナデ、工具ナ デ	修整 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR6/9)	2mm以下の赤褐色、 褐黃色など褐色色點を含む。	良好	外蓋無	
149	SA10	埋土	瓶	縫合部 ～瓶部				縫合傾方向のハケ 目、側縫線不規方 向のハケ目	に近い黄褐色 (3YR7/4)	に近い黄褐色 (10YR2/4)	1～3mmの乳白色點を 多く、1～2mmの褐色 色點を少し含む。	良好			
150	SA10	埋土	瓶	瓶部				底、傾方向の丁寧な きめ、瓶方向の、 ナ	底、傾方向の丁寧な きめ	褐色 (7.5YR7/4)	黒褐色 (2.5Y3/1)	1～2mmの乳白色、褐 色、白褐色を多く含 む。	良好		
151	SA10	埋土	鉢	口縁部 ～底部	13.3	8.8	44.0	えきや、瓶脚付接合 方向のハケ目	口縫部工具ナデ、瓶 脚強化のため調整不 規正	に近い黄褐色 (10YR7/2)	板褐色 (2.5Y7/2)	1～3mmの乳白色、褐 色色點を含む。1mm程 の褐色色點を少し含む。	良好		
152	SC1	埋土	瓶	口縁部 ～底部	22.6			口縫部傾方向のナ デ、二三ナデ、側め方 向のハケ目	口縫部傾方向のハケ 目、側め方向のち ナデ	に近い褐色 (3YR6/4)	褐色 (2.5Y6/9)	3mm以下の赤褐色、 1mm以下の褐色色點を 含む。	良好		
153	SC1	埋土	瓶	口縁部				口縫部傾方向のナ デ、側縫線、側め方 向のハケ目	口縫部傾方向のナ デ、瓶方向のハケ目	淡褐色 (2.5Y7/2)	に近い褐色 (10YR7/3)	1～5mmの褐色、1～ 2mm褐色、乳白色點を 多く含む。	良好		
154	SC1	埋土	瓶	口縁部				口縫部傾方向のハ ケ目、瓶底強化文	瓶方向のナデ	黒褐色 (2.5Y3/1)	黒褐色 (2.5Y3/1)	1mm以下の褐色、黑 色色點を含む。	良好		
155	SC1	埋土	瓶	口縁部 ～底部	20.4	20.4	45.0	底凹、瓶底強化文	底凹	褐色 (3YR6/9)	に近い黄褐色 (10YR6/4)	1～2mmの乳白色點を 多く含む。1～3mm乳 白色點を少し含む。	良好		

第15表 弥生土器観察表8

番号	出土 位置	出土 地点	器種	部位	法規 (cm)			手法・調整・文様等		色調		出土の特徴	焼成	備考	接合関係	
					口径	底高	底径	外面	内面	外面	内面					
159	SC1	廢土	灰土	鉢形～ 瓶形			G.2B	矩方向のハケ目、底 凹部斜め丸み	底化しているが、お そらくナメ	に赤い黄色 (7.5YR6/4)	に赤い黄色 (7.5YR6/4)	Zmm以下の黒灰、灰白、 1mm以下の乳白色粘土 含む。	33%			
167	SC1	廢土	灰土	輪軸			(4.0)	底神さえ	底神さえ	黄褐色 (2.5YR4/3)	黄褐色 (2.5YR4/3)	1～2mmの乳白色粘土 少し含む。	良好			
158	SC1	廢土	灰	瓶形			(3.0)	ナメ、底神斜め丸み	ナメ	褐色 (7.5YR7/6)	に赤い黄褐色 (10YR7/6)	1mm程の乳白色、灰白 色、半透明粘土を少し含 む。	良好			
159	包含 層	工具	灰	口縁部～ 瓶形	25.6			矩方向のハケ目	底、底方向のハケ目	に赤い黄色 (7.5YR6/3)	に赤い黄褐色 (10YR7/3)	1～2mmの乳白色、灰 白、暗色粘土を多く含む。	33%	内外表面化 している。		
160	包含 層	工具	灰	口縁部～ 瓶形	(2.4.6)			口縁部横方向のナ メ、側面研、斜め方 向のハケ目	口縁部横方向のナ メ、側面研、斜め方 向のハケ目、底神斜め丸 みのため斜面削除	口縁部横方向のナ メ、側面研、斜め方 向のナメ、底神斜め丸 みのナメ	浅褐色 (7.5YR6/3)	に赤い黄色 (7.5YR6/3)	Zmm以下の乳、乳白色、 暗色粘土を多く含む。	良好	外蓋にスリ ッジ	
161	包含 層	工具	灰	鉢形～ 瓶形			(4.1)	側面研方向のナ メ、側面研、斜め方 向のハケ目、底神斜め丸 みのため斜面削除	側面研方向のナ メ、側面研、斜め方 向のナメ、下部 T字ナメ	側面研方向のナ メ、側面研、斜め方 向のナメ、下部 T字ナメ	に赤い黄褐色 (10YR6/3)	に赤い黄褐色 (7.5YR6/3)	1～2mmの乳白、褐色、 灰白色粘土を多く含む。	良好		
162	包含 層	工具	灰	口縁部～ 瓶形	(2.4.4)			口縁部横方向のナ メ、底神斜め丸 みのナメ	口縁部横方向のナ メ、底神斜め丸 みのナメ	口縁部横方向のナ メ、底神斜め丸 みのナメ	褐色 (7.5YR6/3)	に赤い黄色 (7.5YR6/4)	1～3mmの白色粘土を多 く、2～3mmの灰色、 褐色半透明粘土を少し含 む。	33%	外蓋又付属、 底重	
163	包含 層	工具	灰	口縁部～ 瓶形	(2.0.2)			口縁部横方向のナ メ、側面研、瓶形のハ ケ目	口縁部横方向のナ メ、側面研、瓶形の ナメ	口縁部横方向のナ メ、側面研、瓶形の ナメ	褐色 (7.5YR6/3)	同褐色 (7.5YR6/3)	1mmの乳白色粘土を含 む。	良好		
164	包含 層	工具	灰	底部～ 瓶形			(2.0)	底、斜め方向のハケ 目、底神斜め丸み	底、底方向のハケ目	に赤い黄色 (7.5YR6/4) 黑褐色 (7.5YR6/1)	黑褐色 (7.5YR3/1)	1～2mmの黒白粘土を多 く、2～3mmの深色粘土を 少し含む。	33%	内蓋裏面		
165	包含 層	工具	灰	口縁部				瓶ナメ	工具ナメ	に赤い 色 (7.5YR6/4)	に赤い 色 (7.5YR6/4)	Zmm以下の乳白色、灰 白、暗色粘土を多く含む。 Zmm程の褐色半透明粘 土を少し含む。	33%			
166	包含 層	工具	灰	口縁部				工具ナメ	工具ナメ	に赤い黄褐色 (10YR7/3)	に赤い黄褐色 (7.5YR7/4)	3mm以下の乳白、褐色 粘土を含む。	良好			
167	包含 層	工具	灰土	口縁部				底方向のハケ目	底方向のハケ目	に赤い黄褐色 (10YR7/3)	浅褐色 (2.5YR7/3)	Zmm以下の乳白色、灰 白、暗色粘土を含む。	33%			
168	包含 層	工具	灰土	口縁部				口縁部横方向のナ メ、ミガキ	ミガキ	に赤い黄褐色 (10YR7/4)	同褐色 (10YR7/3)	Zmm以下の乳白色、灰 白、暗色粘土を少しあ。	良好			
169	包含 層	工具	灰	口縁部～ 瓶形				口縁部横方向のナ メ、ナメ	底、斜め方向のハ ケ目	褐色 (7.5YR6/3)	同褐色 (10YR7/3)	1～2mmの乳白色、灰 白、暗色粘土を多く含む。	良好	外蓋にスリ ッジ		
170	包含 層	工具	灰	口縁部				溝化のため斜面削除	ナメ	浅褐色 (2.5YR7/3)	浅黄色 (2.5YR7/3)	Zmm以下の灰色、褐色、 乳白色粘土を多く含む。	良好			

第16表 弥生土器観察表9

巡回 番号	出土 位置 地点	層構 部位	法線 (cm)	手作・調整・文様等		色調		出土の特徴	焼成	編号	接合関係		
				口径	底高 差	底径	外面	内面					
171	加古 里	丘陵 上部	直	口縁部			ハケ目	ハケ目	に高い褐色 (GYR6/0)	に高い褐色 (GYR6/0)	1mm以下の褐色點を含む。	良好	
172	加古 里	丘陵 上部	直	口縁部			輪郭波状、ナゲ	横ナゲ	に高い褐色 (GYR6/0)	に高い褐色 (GYR6/0)	2mm以下の褐色、輪郭 な灰白色をわずかに含む。	良好	
173	加古 里	丘陵 上部	直	底部		(10.7)	ナゲ	ナゲ	褐色 (GYR6/0)	に高い褐色 (GYR6/0)	3mm以下の褐色、灰白 色點を多く含む。	良好	
174	留吉 里	丘陵 上部	直	斜面 へ底部		(3.4)	ナゲ、底部押さえ 壁、横方向の工具ナ ゲ	壁、横方向の工具ナ ゲ	褐色 (GYR6/0)	褐色 (GYR6/0)	1mm以下の褐色、灰白色 を多く含む。	良好 外底一帯黒變	
177	留吉 1	直	直	口縫部 ～底部	19.3	27.3	口縫部横方向のナ ゲ、斜面上下端斜面 のハケ目、下平工具 ナゲ、底部横方向のナ ゲ	口縫部横方向のナ ゲ、斜面上下端斜面 のハケ目、下平工具 ナゲ、底部ナゲ	褐色 (GYR6/0)	に高い褐色 (GYR6/0)	1～2mmの灰白、乳白 色點を多く含む。	良好 外底口縫部付 近にスス付着	接合2
178	留吉 2	直	直	口縫部 ～底部	23.2	26.0	口縫部横方向のナ ゲ、斜面横方向のナ ゲ	口縫部横方向のナ ゲ、斜面上下端斜面 のハケ目	に高い黃褐色 (GYR6/4)	に高い黃褐色 (GYR6/4)	1～3mmの褐色、灰白 色點を多く含む。	良好	
179	留吉 3	直	直	口縫部 ～底部	(20.6)		口縫部横方向のナ ゲ、斜面横、斜上方 のハケ目、工具ナ ゲ	口縫部横方向のナ ゲ、斜面横、斜上方 のハケ目	深褐色 (GYR6/6)	に高い黃褐色 (GYR6/6)	1～2mmの褐色、灰白 色點を多く含む。	良好 外底スス付着、 灰度	
180	留吉 1	直	直	口縫部 ～底部	(18.6)		口縫部横方向のナ ゲ、ハケ目のナゲ	口縫部横方向のナ ゲ、ハケ目のナゲ	褐色 (GYR6/0)	褐色 (GYR6/0) 褐色 (GYR6/0)	1～2mmの褐色、1～ 2mmの褐色透明白を多 く含む。	良好	
181	留吉 1	直	直	口縫部 ～底部	(18.6)	12.6	口縫部ナゲ、斜面横 方向のハケ目	口縫部ナゲ、斜面横 方向のハケ目、底 部ナゲ	深褐色 (GYR6/6)	に高い黃褐色 (GYR6/6)	2mm以下の褐色、褐色 を多く含む。	良好	
182	留吉 2	直	直	口縫部 ～底部	(33.4)		堅口穴付	化粧のため調整不 明	浅褐色 (GYR6/4)	浅褐色 (GYR6/4)	1～2mmの淡褐色、1～ 5mmの褐色點を多く 含む。	良好 内底黒化し ている。	
183	留吉 3	直	斜面 ～底部			0.8	斜面方向のハケ目	堅め方向のハケ 目	浅褐色 (GYR6/4)	淡黄色 (GYR7/4)	1～3mmの灰白色、淡 黄色點を多く含む。	良好 内底黒化し ている。	
184	留吉 1	直	直	口縫部 ～底部	11.6	13.6	口縫部横方向のナ ゲ、右方斜面のハケ 目、底部横方向のナ ゲ	化粧のため調整不 明	に高い黃褐色 (GYR6/4)	に高い黃褐色 (GYR6/4)	2mmの乳白色、1～ 2mmの褐色點を多く 含む。	良好	
185	留吉 1	直	直	頂部 ～底部			頂部ナゲ、斜面横方 向のハケ目、底部分 方向のナゲ、脚部工具 ナゲ	頂部ナゲ、斜面横方 向のハケ目、底部分 方向のナゲ、脚部工具 ナゲ	褐色 (GYR6/0)	褐色 (GYR6/0)	1～3mmの褐色、褐 色點を多く含む。1～ 2mmの褐色透明白を少 し含む。	良好	
186	留吉 2	直	斜面 ～底部			5.2	ナゲ	頂部横方向のハケ 目、ナゲ、脚部工具 ナゲ	褐色 (GYR6/6)	褐色 (GYR6/6)	1～2mmの白色、灰白 色點を多く含む。	良好 脚部附近スス 付着	
187	留吉 2	直	斜面 ～底部			10.2	処理しているが、 手さき	処理しているが、 手さき	に高い黃褐色 (GYR6/4)	淡褐色 (GYR6/4)	4mm以下の褐色、2mm 以下の褐色點を含む。	良好 内底黒化し ている。	

第17表 弓生土器観察表10

団面 番号	出土 位置	出土 地點	器種	部位	寸法 (cm)			手造・装飾・文様等		色調		胎土の特徴	焼成	参考	接合部系	
					口径	底高	底径	外面	内面	外面	内面					
188	福丸 1		眞	側部～ 底部				(7.2)	縦方向のハケ目、底 部斜め引きえ	工具ナデ	に深い黒褐色 (10YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	1～4mmの孔穴、1～ 2mm黒色、白色斑を含む。 1～2mm赤褐色斑を少しある。 1mm以下の黒褐色斑を少し含む。	良好	PTRH灰度	
189	福丸 3		眞	側部～ 底部				(4.6)	縦方向のハケ目、底 部斜め引きえのナデ	ナデ、底部斜め引き えのナデ	黄褐色 (2.5Y4/3)	に深い黒褐色 (10YR6/4)	1mm程の乳白色、白色、 赤褐色斑を多く含む。	良好		
190	福丸		眞	底部				3.3	工具ナデ	ナデ	に深い黒褐色 (7.5YR6/3)	に深い黑褐色 (7.5YR6/3)	2mm以下の孔穴、に深 い黒褐色を含む。	良好		
191	福丸 2		眞	側部～ 底部				5.6	縦方向の工具ナデ、底 部斜め引きえのナデ	工具ナデ、底部ナデ	に深い黒褐色 (7.5YR6/4)	に深い黒褐色 (10YR6/4)	1mm以下の孔穴、黑 色、灰白色を多く含む。	良好		
192	福丸		眞	側部～ 底部				3.3	ナデ	ナデ	黒褐色 (10YR3/2)	深褐色 (10YR3/1)	2mm以下の乳白色、 1mm以下GK系の褐色 斑を多く含む。	良好		
193	福丸 3		眞	側部～ 底部				(5.6)	縦方向のハケ目、底 部ナデ	工具ナデ	に深い黒褐色 (2.5YR5/4)	に深い黒褐色 (7.5YR6/4)	1～2mmの孔穴、黑 色、灰白色斑を多く含む。	良好	表面黒化して いる。	
194	福丸 3		眞	底部				(4.6)	斜ナデ、底部ナデ	不定方向のハケ目	に深い黒褐色 (10YR6/3)	に深い黒褐色 (10YR6/3)	1～2mmの孔穴、黑 色斑を多く含む。	良好		
195	福丸 2		眞	口沿部～ 側部	(18.0)				L.底部 横溝 内側 のナ デ、 底部 内側 のハ ケ目	L.底部横溝 内側 のナ デ、 底部 内側 のハ ケ目	に深い黒褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	1mm程の乳白、乳白色、 灰褐色斑を多く含む。	良好		
196	福丸 3		眞	L.底部 ～側部					L.底部横溝 内側 の上部ナデ、開辺ナデ	ナデ	に深い黒褐色 (7.5YR6/4)	に深い黒褐色 (10YR6/4)	4mm以下の孔穴、2mm 以下のに深い黒褐色斑を 含む。	良好	外縁スス付着	
197	福丸 3		眞	L.底部 ～側部	(24.4)				黒化しているが、ハ ケ目	黒化しているが、ハ ケ目	黒化 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	1～4mmの褐色、灰 色斑を多く、1mm程の白 色斑を少し含む。	良好	内外面黒化して いる。	
198	福丸 3		眞	側部～ 底部				(5.6)	黒化しているが、ハ ケ目	電力窓のハケ目	浅灰色 (7.5YR6/4)	浅黄色 (2.5Y7/2)	2mm以下の乳白、烟灰、 灰褐色斑を多く含む。	良好	内外面黒化して いる。	
200	福丸 1		眞	口沿部 ～側部	8.5	25.5	3.8		口沿部横溝 内側 のナ デ、 底部 内側 のハ ケ目 のちぎり	口沿部横溝 内側 のナ デ、 底部 内側 のハ ケ目、 底部ナ デ	褐色 (5YR6/6)	深褐色 (7.0YR5/6)	1～3mmの褐色斑を多 く含む。1mm以下の黒 褐色斑を少し含む。	良好	PTRH灰度	
201	福丸 3		眞	L.底部 ～側部	9.0				黒化しているが、E カキ	工具ナデ	に深い黒褐色 (7.5YR6/4)	に深い黒褐色 (7.5YR6/3)	1～3mmの孔穴、黑 色斑を多く含む。	良好	内外面黒化して いる。	
202	福丸 2		眞	側部～ 底部					ミナギ、底部内側 等	側部ナデ、側面直 角部横溝 内側 のナ デ	褐色 (7.5YR6/4)	褐灰色 (10YR4/1)	1～3mmの褐色、黑色 斑を含む。1～2mm G 系の褐色斑を少し含む。	良好		黒生3
203	福丸 3		眞	底部					口縫物留め、側部 底化しているが、ナ ギ	工具ナデ	褐色 (7.5YR6/6)	褐色 (7.5YR7/6)	3mm以下の孔穴、黑褐 色、褐色斑を多く含む。	良好	表面黒化して いる。	

第18表 弥生土器観察表11

番号	出土 位置	出土 地點	面積	部位	寸法 (cm)		手作・調査・文様等		色調		出土の特徴	成形	備考	组合要素		
					上幅	下幅	底厚	成性	外面	内面						
204	縄丸 2	田	鶴居一 底部		(5.3)	1.9		斜め方向のハケ目	褐色 (7.5YR6/8)	黒褐色 (2.5YR7/0)	1~2mmの黒色、1~ 3mmの灰白色、褐色を 含む。	良好		銘品.3		
205	縄丸 1	田	鶴居一 底部		(2.8)	1.2		工具ナデ	ハゲ目	黒褐色 (2.5YR7/0)	にぶい黒褐色 (10YR7/3)	2mm以下の灰白、黒灰 色、1mm以下にぶい 黒褐色、無彩色の似色光 沢段を含む。	良好			
206	縄丸 2	田	口縫部 ~底部	10.2				口縫側壁方向のナ デ、斜め方向のハ ケ目のちまぎ	斜め方向のナデ、斜 め底	赤褐色 (5YR8/8)	黒褐色 (10YR7/0)	1mm以下の灰白、1~ 2mmの灰白色が連続性を 多く含む。	良好			
207	伝説 不明	田	鶴居一 底部					ナデ	口縫上部ナデ、下部 工具ナデ	黒褐色 (2.5YR6/8)	黒褐色 (2.5YR6/2)	1~3mmの黒色、灰白 色の沢段を多く含む。	良好			
208	縄丸 1	高坪	口縫部 ~底部	27.5	15.8	12.0		ハケ目ちまぎ、 斜底ナデ	斜底ちまぎ、斜底 方向のナデ	赤褐色 (7.5YR6/8)	にぶい黒褐色 (10YR7/0)	3~4mmの灰白、乳白 色を含む。	良好		銘品.2	
209	縄丸 2	高坪	口縫部 ~底部	22.7	18.9	(13.7)		底張り透かし口のナ デ、下部ナリのナ デ、ちまぎ、斜底斜 底ナデ	底張り透かし、 底張り	黒褐色 (7.5YR7/0)	黒褐色 (2.5YR7/0)	1~4mmの黒褐色を 多く含む。	良好	内外面潤滑化 している。		
210	縄丸 2	高坪	口縫部 ~底部	20.0	17.9			黒化している口の底 部ナデ、底張り透かし、 下部ナリのナデ、斜 底ナデ	黒化しているが、 ナリと混ざる。斜 底ナデ	にぶい赤褐色 (7.5YR6/4)	にぶい赤褐色 (7.5YR6/0)	2mm以下の灰白、黒灰 色を含む。	良好	内外面潤滑化 している。		
211	縄丸 1	高坪	坪原	(24.2)				上縫隙方向のハ ケ目、下部ナデ	斜方向のハケ目	褐色 (7.5YR6/0)	にぶい黒褐色 (10YR7/0)	1~2mmの黒褐色、 灰褐色を含む。	良好	黒化している。	銘品.2	
212	縄丸 2	高坪	坪原	(23.8)				口縫隙ナデ、斜底 方向のナデ	口縫隙方向のナ デ、斜底丁寧なナ デ	にぶい黒褐色 (10YR6/4)	黒褐色 (10YR6/0)	1mmの灰白、1~ 2mmの灰白色が連 続性を含む。	良好			
213	縄丸	林	口縫部 ~底部	(14.8)				口縫側面斜め方向の ハケ目ナデ、斜底 上縫隙方向のナ デ、下部右ナデ	口縫部ナデ、斜底 上縫隙方向のナ デ、下部右ナデ	にぶい黒褐色 (7.5YR6/4)	にぶい黒褐色 (7.5YR6/0)	2mm以下の灰白、乳白 色、1~3mmの黒褐色を 沢段を多く含む。	良好			
214	縄丸 1	林	口縫部 ~底部	14.3	10.1	3.5		口縫側面斜め方向の ナデ、底張りのナ デ、斜底左ナデ	にぶい黒褐色 (10YR6/4)	黒褐色 (7.5YR7/0)	1~3mmの白色沢段を多 く含む。2~3mmの黒 褐色を少し含む。	良好	内外口縫側付 近スズ付	銘品.3		
215	縄丸 2	林	口縫部 ~底部	(24.0)				口縫側面斜め方向の ナデ、斜底左のナ デ、斜底左ナデ	口縫側面斜め方向の ナデ	黒褐色 (7.5YR6/0)	黒褐色 (2.5YR7/0)	1~2mmの灰白、1~ 3mmの黒褐色を多く含 む。1~3mmの灰白、 黒褐色を少し含む。	良好	内外面潤滑化 している。	銘品.3	
216	縄丸 1	田	口縫部 ~底部	7.8	7.9	2.8		口縫側面斜め方向の ナデ、斜底左ナデ	ナデ	黒褐色 (7.5YR6/0)	黒褐色 (7.5YR6/0)	1mm以下の灰褐色、白 色、黒褐色を含む。	良好	外周底面附近 黒斑あり		
217	縄丸 2	手作 土器	口縫部 ~底部	7.1	5.3	1.9		ナデ	工具ナデ	黒褐色 (10YR6/0)	黒褐色 (7.5YR6/0)	1~3mmの灰白、和 色を多く含む。1~ 2mmの黒褐色を少し含 む。	良好	底部付近スズ 付		
218	縄丸 2	高坪	坪原				(19.8)		斜め、底方向のハ ケ目のナデ	斜め、底方向のハ ケ目のナデ	褐色 (7.5YR6/0)	褐色 (7.5YR6/0)	1~2mmの黒褐色を含 む。	良好		

第19表 弥生時代石器計測表

件名 番号	断続	出土 位置	出土地点	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
18	石刀丁	SA1	層土	カルンフェルス	4.8	8.1	0.9	61.9	
37	石刀	SA4	層土	カルンフェルス	4.1	4.5	1.3	26.5	
38	圓石	SA4	層土	シルト岩	6.8	1.8	0.7	12.0	
39	圓石	SA4	層土	シルト岩	6.6	2.4	1.4	60.3	
40	圓石	SA4	床	シルト岩	14.5	3.8	1.4	122.3	
41	圓石	SA4	層土	尾鷲山酸性岩紅	11.5	9.5	4.0	720.6	
42	圓石	SA4	層土	尾鷲山酸性岩紅	11.1	10.4	5.4	920.2	
43	圓石	SA4	層土	尾鷲山酸性岩紅	10.2	9.8	4.6	709.7	
44	圓石	SA4	床	尾鷲山酸性岩紅	13.3	11.0	4.8	970.3	
45	台石	SA4	床	尾鷲山酸性岩紅	9.6	18.5	7.4	1561.8	
59	切削刃器	SA5	土坑1	カルンフェルス	4.8	2.7	0.3	1.4	
60	石刀丁木軸正	SA5	床	カルンフェルス	5.0	10.5	0.8	89.2	
61	圓石	SA5	床	シルト岩	7.6	3.3	1.4	42.5	
62	圓石	SA5	床	粘板岩	7.2	3.3	2.9	127.3	
63	圓石	SA5	床	シルト岩	9.1	4.4	1.1	70.1	
64	圓石	SA5	床	シルト岩	10.7	3.9	2.6	158.4	
65	圓石	SA5	床	尾鷲山酸性岩紅	11.6	10.4	5.6	1042.0	
90	石刀丁	SA7	床	カルンフェルス	4.6	10.2	1.0	52.7	
91	石刀丁	SA7	床	カルンフェルス	4.7	9.5	1.0	56.4	
92	圓石	SA7	土坑1	粘板岩	6.1	2.5	1.3	17.5	
93	圓石	SA7	床	砂岩	5.9	5.1	2.6	117.2	
112	石刀丁	SA7	層土	カルンフェルス	4.3	11.1	0.7	43.0	
113	石刀丁	SA7	層土	カルンフェルス	4.0	7.3	0.7	34.0	
114	石刀丁	SA7	層土	カルンフェルス	2.6	2.8	0.3	2.2	
115	石刀丁	SA7	層土	カルンフェルス	1.9	3.1	0.4	4.6	
116	石刀丁木軸正	SA7	層土	カルンフェルス	3.4	4.6	0.6	30.2	
117	二次加工片	SA7	層土	尾鷲山酸性岩紅	8.0	5.1	2.7	92.7	
118	圓石	SA7	層土	シルト岩	9.3	4.1	1.6	64.3	
119	圓石	SA7	層土	カルンフェルス	4.9	8.3	1.0	57.0	
120	圓石	SA7	層土	綠色砂岩	8.5	6.7	3.3	230.3	
121	圓石	SA7	層土	華白岩	12.1	3.8	2.8	177.7	
122	圓石	SA7	層土	滑石	11.1	9.0	4.5	598.3	
135	圓石	SA8	床	尾鷲山酸性岩紅	11.5	10.1	5.7	992.5	
140	石刀丁木軸正	SA8	床	カルンフェルス	5.4	9.1	1.1	74.2	
141	圓石	SA9	床	尾鷲山酸性岩紅	12.5	11.0	6.1	1212.6	
175	圓石	仮合版	Ⅱ層	尾鷲山酸性岩紅	11.6	10.4	6.0	1072.9	
176	圓石	監査版	Ⅱ層	カルンフェルス	12.8	10.1	7.6	1428.7	

第6節 時期不明の遺構

ら時期は不明である。

A-1 区、B 区のⅢ層上面で溝状遺構が 14 条検出された。A-1 区で 7 条、B 区で 7 条検出している。

(1) A-1区溝状遺構（第48図・第49図）

A-1 区で検出された溝状遺構は、東西方向が 4 条、南北方向に 3 条あり、そのうち幾筋かは切り合いの関係にある。SE 1 は幅 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.3 m であり、SE 3 は幅 0.3 ~ 0.5、深さ 0.4 m を測る。SE 2、SE 4 ~ SE 7 は、幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.3 m である。埋土は黒色土を主体とした埋土で、K-Ah や橙色砂粒を含んでいる。埋土中から遺物の出土はなく、時期については不明である。切り合い関係は、SE 1 が SE 4 を切っている。SE 2 ~ SE 4 については、SE 3 が SE 2 の上になるように切っており、SE 2 は、SE 4 に切られている。SE 6 は SE 7 を切っている。

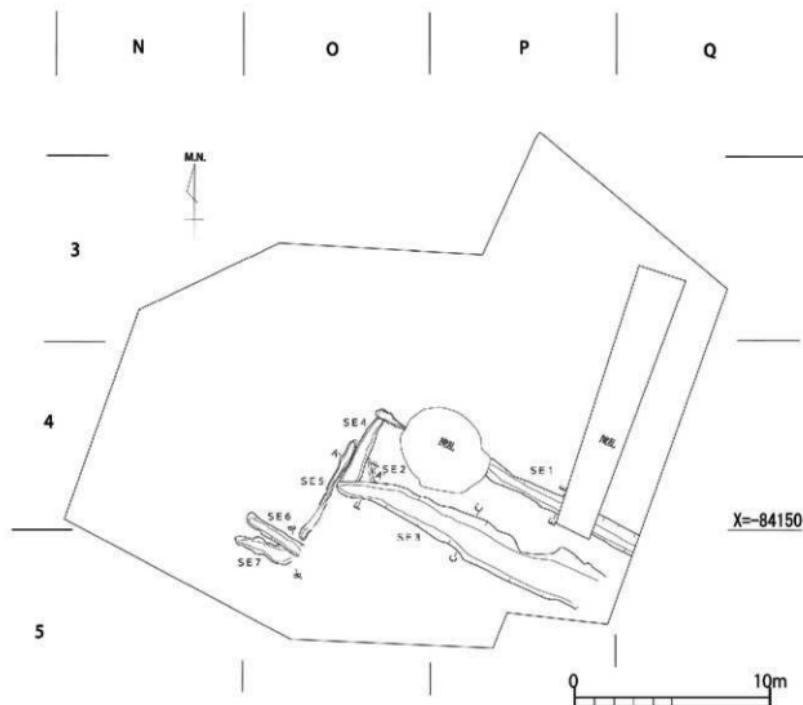
以上のことから、A-1 区で検出された溝状遺構の先後関係は、古いほうから SE 2、SE 4 となり、SE 1 と SE 3 については、SE 2・4 より新しくなる。また SE 1 ~ 4 と SE 5 ~ 7 の関係は切り合い関係がなく不明である。

(2) B 区溝状遺構（第50図・第51図）

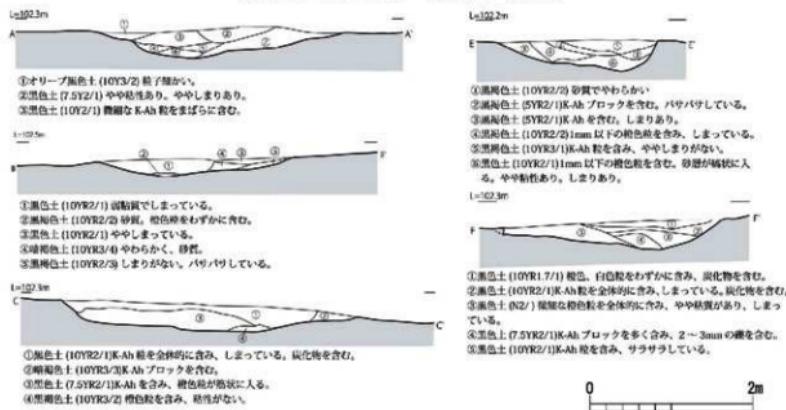
東西方向に 5 条、南北方向に 2 条の溝状遺構が検出され、SE 8 は幅 1.5 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m を測り、他は幅 1 m 程度、深さ 0.2 m 程である。黒色土を主体とした埋土上でわずかに K-Ah 粒を含む。遺物は、SE 8 で陶磁器が 1 点、土器片が数点出土しており、SE 13・14 では弥生土器片がわずかに出土しているのみである。出土した弥生土器片はいずれも小片でかつ摩滅しており、固化できるものではなかった。また溝の埋没時期を特定できるものもなく、唯一 SE 8 から出土した陶磁器片は近代のものである。

溝状遺構の切り合い関係は、SE 8 は SE 9・10・14 を切っており、SE 12・13 に切られている。また SE 12・13 は東側で 1 条となり、SE 11 に切られている。

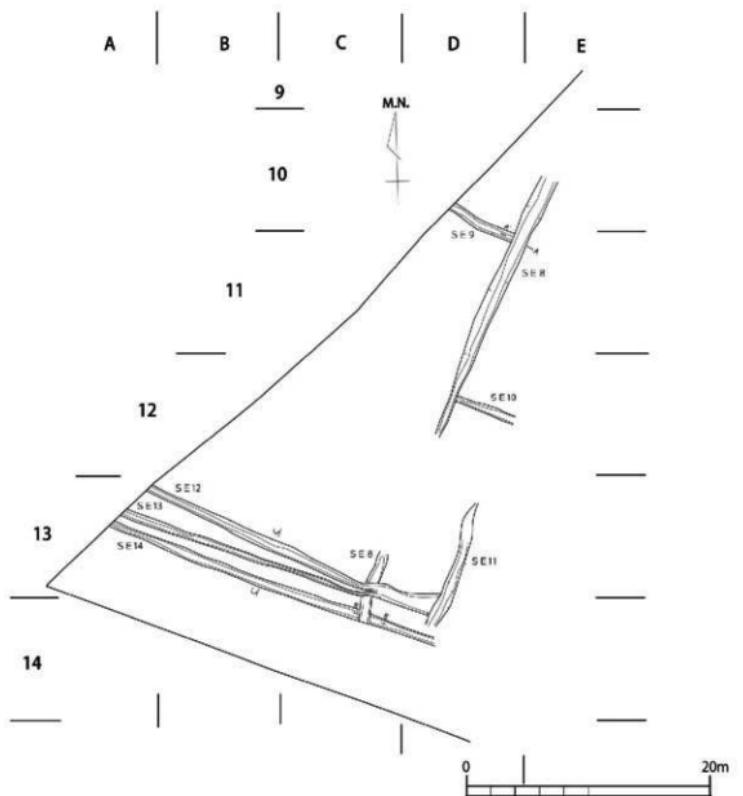
時期については、出土した弥生土器片はいずれも小片であり摩耗していることから、後世の混入と考えられ、さらには出土した遺物も少ないことか



第48図 A-1区SE1～7分布図 (1/250)



第49図 A-1区SE1～7土層断面図 (1/60)



第50図 B区SE8～14分布図 (1/400)

①黒色土(2.5Y2/1)K-An絆を多く含み、しまりがない。
 ②褐色土(3Y3/2)リラクサウしている。
 ③暗褐色土(10Y3/2)K-An絆を非常に多く含み、しまりがない。
 ④黒褐色土(2.5Y3/1)纖細な無色透明粒をわずかに含む。
 ⑤黒色土(2.5Y2/1)粒子細かく、K-An絆をわずかに含む。

①オリーブ黒色土(10Y3/2)粒子細かい。
 ②褐色土(7.5Y2/1)やや粘性あり。ややしまりあり。
 ③褐色土(10Y2/1)纖細なK-An絆をまばらに含む。

①黒褐色土(2.5Y3/1)ややしまりがない。1mmほどの白色粒がまばらに含む。
 ②褐色土(10Y2/1)やや粘性あり。
 ③褐色土(10Y2/1)やや粘性あり、纖細な白色粒をわずかに含む。
 ④褐色土(7.5Y2/1)2mm以下のK-An絆、纖細な白色粒を含む。
 ⑤黒色土(10Y2/1)纖細な白色粒をまばらに含む。

第51図 B区SE8～14 土層断面図 (1/60)

第V章 自然科学分析

第1節 目的

本遺跡では縄文時代草創期の集石遺構1基と弥生時代の竪穴住居跡9軒が検出された。集石遺構からは遺物の出土ではなく、周辺で同層位から出土した土器から時期を推定している。そのため遺構内から検出した炭化物を放射性炭素年代測定することによって、科学的データを得ることができる。

また、弥生時代の竪穴住居跡では、3軒の焼失住居が検出され、多くの炭化材が検出された。その中で屋根材に使用された茅と推測されるストロー状の炭化物があり、その種類を特定するために、樹種同定及び植物珪酸体分析を行った。さらにフローテーションで得られた炭化種子の種実同定を実施した。これらのことにより住居の屋根材や食糧事情に迫ることができる。

以上のような理由から自然科学分析を株式会社古環境研究所に業務委託した。

第2節 放射性炭素年代測定

(1) 試料と方法

① S I 1 埋土中炭化物

前処理：酸 - アルカリ - 酸洗浄

測定法：AMS

② S I 1 外側検出の炭化物

前処理：酸 - アルカリ - 酸洗浄

測定法：AMS

③ S A 4-15 炭化種実（イネ）

前処理：酸 - アルカリ - 酸洗浄

測定法：AMS

④ S A 7-26 炭化種実（イチイガシ）

前処理：酸 - アルカリ - 酸洗浄

測定法：AMS

(2) 測定結果

① S I 1 埋土中炭化物

^{14}C 年代（年BP） 11,430±60

$\delta^{13}\text{C}$ （‰） -27.1

補正 ^{14}C 年代（年BP） 11,400±60

曆年代（西暦）

交点：cal BC 11,460

1 σ : cal BC 11,820-11,740、11,530-11,210

2 σ : cal BC 11,840-11,720、11,500-11,200

（1 σ : 68%確率、2 σ : 95%確率）

② S I 1 外側検出の炭化物

^{14}C 年代（年BP） 11,320±60

$\delta^{13}\text{C}$ （‰） -25.8

補正 ^{14}C 年代（年BP） 11,310±60

曆年代（西暦）

交点：cal BC 11,230

1 σ : cal BC 11,500-11,200

2 σ : cal BC 11,810-11,750、11,520-11,180

BC 11,140-11,080

（1 σ : 68%確率、2 σ : 95%確率）

③ S A 4-15 炭化種実（イネ）

^{14}C 年代（年BP） 1960±40

$\delta^{13}\text{C}$ （‰） -23.2

補正 ^{14}C 年代（年BP） 1990±40

曆年代（西暦）

交点：cal AD 20

1 σ : cal AD 40-60

2 σ : cal BC 30-AD 90

（1 σ : 68%確率、2 σ : 95%確率）

④ S A 7-26 炭化種実（イチイガシ）

^{14}C 年代（年BP） 1950±40

$\delta^{13}\text{C}$ （‰） -25.9

補正 ^{14}C 年代（年BP） 1940±40

曆年代（西暦）

交点：cal AD 70

1 σ : cal AD 30-100

2 σ : cal BC 30-AD 130

（1 σ : 68%確率、2 σ : 95%確率）

(2) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(3) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

(4) 補正¹⁴C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(%)に標準化することによって得られる年代である。

(5) 历年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを見示す。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。INTCAL98では、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と較正曲線との交点の曆年代値を意味する。1シグマ σ (68%確率)と2 σ (95%確率)は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

文献

Stuiver et al. (1998). INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院. p.1-36.

第3節 樹種同定

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、縄文時代草創期の集石遺構(SI1)から採取された炭化材2点である。これらは、年代測定に用いられたものと同一試料である。なお、

参考試料として弥生時代後期の住居跡(SA9)から採取された炭化材についても観察を行った。

(3) 方法

試料を削折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

①コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科
横断面: 年輪のはじめに大型の道管が1~数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面: 道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面: 放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節には、カシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがある。北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

②広葉樹 broad-leaved tree

横断面: 道管が存在する。

放射断面: 道管と放射組織が存在する。

接線断面: 道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお、本試料は保存状態が悪く広範囲の観察が困難なことから、広葉樹の同定にとどめた。

③タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科

横断面: 基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面: 柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。

(5) 所見

分析の結果、縄文時代草創期の集石遺構(S I 1)から採取された炭化材は、いずれもコナラ属コナラ節と同定された。コナラ属コナラ節には、ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。なお、コナラ節の種実(ドングリ)は、水さらしや加熱処理などのアク抜きをしないと食用にならない。弥生時代後期の住居跡(S A 9)から採取された炭化材は、広葉樹およびタケ亜科と同定された。

文献

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100。

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

第4節 植物珪酸体分析(灰像分析)

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プランクトン・オーパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山、2000)。

(2) 試料

試料は、弥生時代後期の住居跡(S A 9)から採取された試料1と試料2の炭化材である。これらは、屋根材などの建築部材の一部と考えられる。

(3) 分析法

電気炉灰化法(550°C・6時間)によって灰化し、オイキットで封入してプレパラートを作成した。検鏡は偏光顕微鏡を用いて、100~400倍の倍率を行った。なお、灰化物の内部を調べるために、灰像組織の一部を破壊して観察を行った。

(4) 分析結果

灰像分析の結果、イネ科植物の茎部や葉鞘に由来する組織片が確認された。茎部や葉鞘に由来する植物珪酸体や灰像組織の研究は、これまであまり行われていないことから確実な同定は困難であるが、こ

こで検出されたものはメダケ属(メダケ節やネザサ節)などのタケ亜科の茎部に類似している。また、メダケ属(メダケ節やネザサ節)の機動細胞に由来する植物珪酸体も多く観察された。これらは、試料となった炭化材に付着していたものと考えられる。

(5) 考察

弥生時代後期の住居跡(S A 9)から採取された炭化材は、メダケ属などのタケ亜科の茎部(葉鞘を含む)と考えられ、タケ亜科の茎(幹)が屋根材などの建築部材として利用されていたと推定される。なお、前述(第3節)のように、試料1には広葉樹の炭化材も含まれている。

第5節 炭化種実同定

(1) はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種殻を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

(2) 試料

試料は、弥生時代後期の住居跡(S A 4、S A 5、S A 7、S A 8、S A 9)から分別採取された計117ケースである。

(3) 方法

肉眼及び双眼立体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(4) 結果

分類群

分析の結果、樹木2、草本4の計6分類群が同定された。学名、和名および粒数を第IV章表3~7に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 子葉(炭化) ブナ科

炭化していて黒色で、梢円形を呈する。表面はなめらかで、縱方向に一条の凹線が入る。

モモ *Prunus persica* Batsch核（破片）バラ科

黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。基部に針状の付属物を持つ。黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

アカネ科？ *Rubiaceae*？ 種子

偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形の穴がある。ここでは炭化の度合いが著しく、表面模様が観察できないことからアカネ科？とした。

キケマン属 *Corydalis* 種子 ケシ科

黒色の円形でやや扁平を呈す。へそ部分はやや凹み、仮種皮が残る。

不明種実

種実ではあるが炭化の度合いが著しく、表面模様が観察できないことから、不明種実とした。

不明植物遺体

種実の形態を示さず、炭化して表面模様が観察できないことから、不明植物遺体とした。

(5) 種実群集の特徴

S A 4

イネ3、カヤツリグサ科4、アカネ科？6、不明種実4が同定された。

S A 5

アカネ科？2が同定された。

S A 7

イチイガシ1、イネ1、アカネ科？8、不明種実1が同定された。

S A 8

モモ1、アカネ科？11、不明種実1が同定された。

S A 9

キケマン属10、昆虫1が同定された。

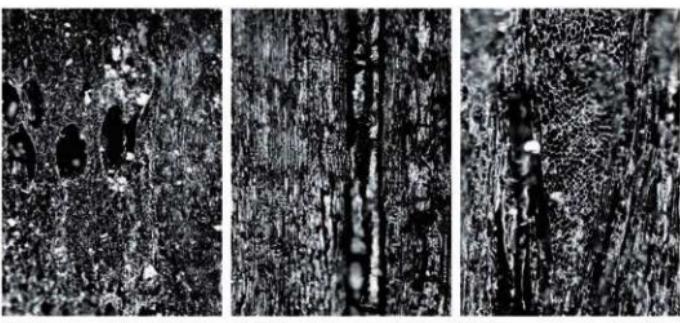
(6) 考察

弥生時代後期の堅穴住居跡（S A 4、S A 5、S A 7、S A 8、S A 9）から分別採取された炭化種実では、イネ4、モモ1、イチイガシ1、キケマン属10、カヤツリグサ科4、アカネ科？27が同定された。栽培植物であるイネ、モモは共に大陸から伝来し、弥生時代以降多くの遺跡から出土する。有用植物であるイチイガシは、西南日本の照葉樹林を構成する主要高木で、果実はカシ類の中で渋抜きなしに食べられる唯一の種類である。キケマン属は人里植物ないし畑作雑草であり、多少薬用等有用に利用できるが、明らかではない。

文献

- 笠原安夫（1985）日本雜草圖說、養賢堂、494p.
笠原安夫（1988）作物および田畠雜草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.131-139.
金原正明（1996）古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナルNo.409、ニューサイエンス社、p.15-19.
南木睦彥（1991）栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通I、雄山閣出版株式会社、p.165-174.
南木睦彥（1993）糞・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283.
古崎昌一（1992）古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナルNo.355、ニューサイエンス社、p.2-14.
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食、雄山閣、187p.

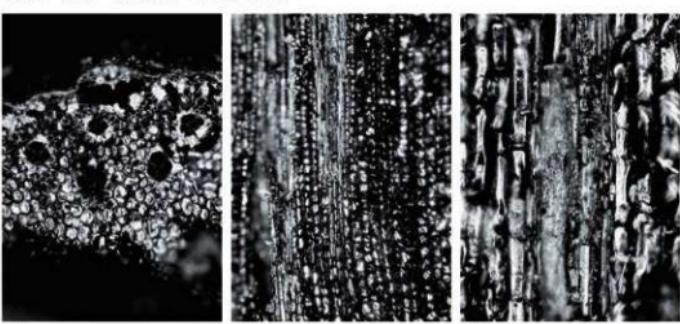
八幡第2遺跡の炭化材



1.SI-1 試料1 墓土中 コナラ属コナラ節

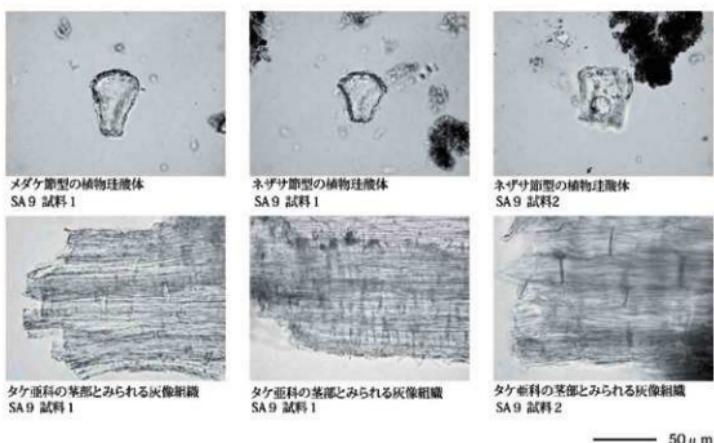


2.SI-1 試料2 集石外側 コナラ属コナラ節

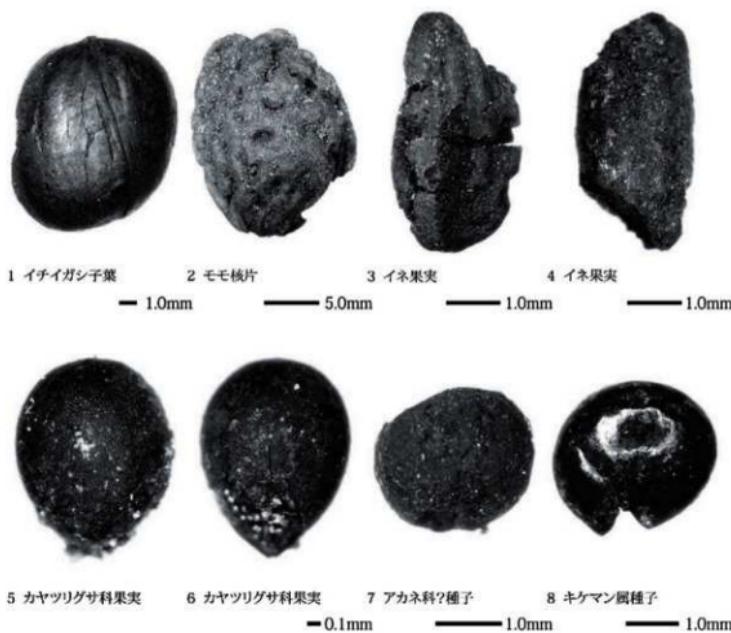


3.SA-9 試料1 Na2 タケ亜科

植物珪酸体および灰像の顕微鏡写真



八幡第2遺跡の炭化種子



第 VI 章 まとめ

本遺跡では、縄文時代草創期と弥生時代後期の遺構・遺物が確認された。本章では、各時期における遺構・遺物について若干の言及を加えることでまとめとしたい。

第 1 節 縄文時代草創期

縄文時代草創期の遺構は集石遺構 1 基のみで、遺物の出土も少量であった。出土した隆帯文土器は、隆帯の形態・隆帯の貼り付け方・隆帯上に爪形文を施す特徴から宮崎市塚原遺跡⁽¹⁾出土のものに類似しており、近接した時期が想定される。

疊と疊の間や周辺で確認された炭化物を加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定を行った。その結果、遺構内の炭化物は、 $11,400 \pm 60$ 年 BP (1 の曆年代で BC11,820 ~ 11,740, 11,530 ~ 11,210 年)、周辺の炭化物では $11,310 \pm 60$ 年 BP (同 BC11,500 ~ 11,200 年) の年代値が得られた。

第 2 節 弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は、竪穴住居跡 9 軒、土坑 1 基検出され、竪穴住居跡を中心に弥生時代後期の土器が多く出土している。その土器について、分類を行い、整理したいと思う。宮崎県の土器師の編年として松永幸寿氏の論考⁽²⁾があり、ここでは松永氏の論考を参考に、編年の基準となっている甕について分類し、その位置付けを行う。分類は、口縁部から胴部にかけて残存している 19 個体を対象とした。搅乱土坑から出土した 182、183 は大型甕になると思われるが分類対象から外した。分類基準は胴部形態・口唇部形態によって以下のように分けられる。

A 1 類 (24・30・66・69・70・152・160・186)

胴部形態は球脣を呈するものである。口唇部は横ナデによって面取りされ面をもつ。口縁部は直線的に外側にのびる。しかし、24 のみは口縁部があまり外側に開かず上位付近でわずかに外反し、口縁部形態に違いがみられる。

B 1 類 (67・132・161~164・177・179・184)

胴部形態は卵形を呈する。口唇部は面取りをし、直線的に外側にのびる口縁部をもつ。

C 1 類 (142・148・178)

胴部形態は長脣を呈する。胴部が直線的になるため他に比べ頸部の屈曲は緩くなる。口唇部は面取りをし、直線的に外側にのびる口縁部をもつ。

A 2 類 (50・181)

胴部形態は球脣を呈する。やや長い口縁部をもち、口唇部の面取りが甘く丸くなる。

以上、口縁部形態・口唇部形態から出土した甕は 4 類型に抽出することができた。

今回分類の対象とした甕は、おおむね中型甕の範囲に入るが、小型甕もみられる。

今回分類した甕の大半が口唇部を面取りする 1 類に当たる。口縁部が外方に開き、口唇部を横ナデによって面をつくるものは、都農町新別府下原遺跡の 1 号周溝状遺構⁽³⁾や高鍋町大戸ノ口第 2 遺跡の 13 号竪穴住居⁽⁴⁾から出土のものにみられる。

今回検出された 9 軒の竪穴住居跡の時期について、まずそのなかで一番多くの遺物が出土した S A 7 の時期を松永氏の編年⁽⁵⁾をもとにみていく。松永氏は宮崎を県北山間部・県北平野部・宮崎平野北部・宮崎平野南部を大淀川流域と清武川流域と 5 つに細分し、在地系中型甕を底部形態に着目し編年している。その中型甕を軸に他の器種を編年上に位置づけている。当遺跡は宮崎平野部北端にあたり、宮崎平野部北端の編年（以下松永編年①）を使用し、補足的に県北平野部（以下松永編年②）・宮崎平野南部大淀川流域（以下松永編年③）の編年を参考にしたい。

S A 7 からは甕、壺、高杯、器台が出土している。

甕は前述したように口縁部形態は 1 類となる。底部をみると上げ底になるものや端部がわざかに張り出し平底のものがある。このような特徴をもつものは松永編年①の 2 期が想定される。67 は日向市百町原遺跡の周溝状遺構⁽⁶⁾出土の甕に類似しており、松永編年②の 2 期～3 期にあたる。甕以外の器種をみていくと、82 の高杯は新別府下原遺跡の 2 号

土壤⁽⁷⁾出土のものに類似し、松永編年①の2期にある。器台は宮崎平野部北部に良好な資料がないので宮崎平野南部大淀川流域から2期が想定される。以上のことからSA7は松永編年①や③で2期に相当することから松永編年の2期と考えられ、弥生時代後期後葉となる。

次にそのほかの竪穴住居跡をみていくと、SA1～SA3は出土した土器は少なく、時期比定は困難であるが、SA2の上げ底の甕(22)からSA7と同時期と考えられる。SA3は平底の甕(17)からSA7よりは若干新しいと考えられる。

そしてSA4は33や35の甕の底部径がSA7出土の甕より小さくなってしまっており、大戸ノ口第2遺跡13号竪穴住居⁽⁸⁾出土の甕が推測されることから松永編年①の3期に相当すると考えられる。SA5は床面では良好な資料がなく、床面出土の高坏(54)や覆土出土の甕(50)の口唇部の特徴から、松永編年①の3期～4期が推測される。SA8は地床炉出土の甕(132)や高坏(130)の特徴から松永編年①の3期～4期の時期に相当すると考えられる。

SA9については出土した上器も少なく推測の域を超えないが、SA8と接合関係にあり、近い時期が想定される。SA10は出土した土器は松永編年①の3期～4期の時期に相当する。出土した土器は全て覆土中であることから、住居の時期は同時期かそれ以前の時期に属すると推測される。

以上、出土した土器から竪穴住居跡の時期をみてきた。竪穴住居跡の変遷は、SA7・SA2が同時期に存在し、弥生時代後期後葉の時期に当たる。SA3がそれに続き、SA4が庄内式併行期の前半となる。SA5・SA8～SA10は庄内式併行期にあたると推測される。また、フローテーションで確認された炭化種実のうちSA4のイネとSA7のイチイガシを放射性炭素年代測定した。その結果、イネは 1960 ± 40 年BP(暦年代 1σ :cal AD 40-60 2 σ :cal BC 30-AD 90)、イチイガシは 1950 ± 40 年BP(暦年代 1σ :cal AD 30-100 2 σ :cal BC 30-AD 130)という年代値が得られた。二つの種実はほぼ同時期の年代値が得られ、わずかにイネ

が古くなる。この結果は、土器から推測したこと若干の相違があるが、SA4で床面から良好な資料が出土していないことを考慮すれば、SA4とSA7はほぼ同時期に存在していた可能性がある。

またSA5・SA7では外来系土器が出土している。SA5の土坑2から出土した52は長頸の甕である。大分県鹿道原遺跡の24号竪穴住居⁽⁹⁾で出土している二重口縁甕や甕に類似している。鹿道原遺跡は大野川中流域に位置する遺跡で、52はその影響を受けているものだと考えられる。県内では、高千穂町岩戸五ヶ村遺跡⁽¹⁰⁾で大野川上・中流域の影響を受けた胴部に工字突帯のある甕や安国寺式二重口縁甕の出土が認められる。

そしてSA7で出土した71は、平底の長頸甕で、口縁部に粘土を貼り付けている。このような特徴をもつものは高知の弥生時代中期後半～後期の土器にみられ、高知県田村遺跡群IIの222号竪穴住居跡や117号土坑⁽¹¹⁾から出土した長頸甕に類似している。県内では、瀬戸内地方の弥生時代中期後半～後期前半で象徴的な文様になる凹線文土器が新富町新田原遺跡⁽¹²⁾や鬼付女西遺跡⁽¹³⁾など51遺跡で出土している。南九州と瀬戸内系との交流については石川悦雄氏⁽¹⁴⁾や田崎博之氏⁽¹⁵⁾や梅木謙一氏⁽¹⁶⁾の論考があり、梅木氏は県内出土の凹線文土器の搬入品の多くは伊予地方からのものであるとしている。また鬼付女西遺跡⁽¹⁷⁾では凹線文土器とともに高知の土佐型甕が出土している。これらの凹線文土器や土佐型甕は後期初頭のものであり、SA7で高知の長頸甕と類似した土器が出土したこと、後期後半期の四国地域との交流関係を知る上で良好な資料となる。

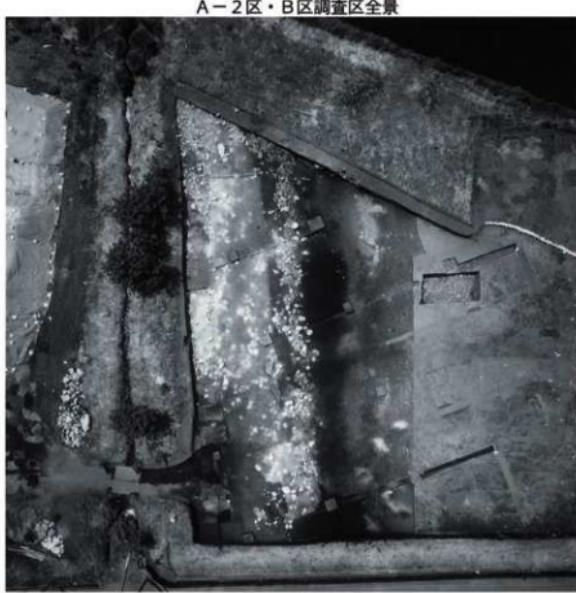
【註】

金（基盤研究（c）（1））

- (1) 宮崎県埋蔵文化財センター 2001「松元遺跡・井手口遺跡・塙原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第44集
- (2) 松永幸寿 2004 「日向における古式土師陶の成立と展開－宮崎平野を中心として－」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（c）（1））
- (3) 都農町教育委員会 1990「新潟府下原遺跡」『都農町文化財報告書』第3集
- (4) 高鍋町教育委員会 1991「大戸ノ口第2遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第5集
- (5) 註2と同じ
- (6) 日向市教育委員会 1994「百町原遺跡」『県営箇堀整備事業百町原地区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (7) 註3と同じ
- (8) 註4と同じ
- (9) 千歳村教育委員会 2001「鹿道原遺跡」『千歳村文化財調査報告書』第VII集
- (10) 高千穂町教育委員会 2000「岩戸五ヶ村遺跡」『高千穂町文化財調査報告書』第12集
- (11) 〈財〉高知県埋蔵文化財团埋蔵文化財センター 2004「田村遺跡群Ⅱ」『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第85集
- (12) 新富町教育委員会 1986「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集
- (13) 宮崎県教育委員会 1989「鬼付女西遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第32集
- (14) 石川悦雄 1984「日向における外来系土器の伝播とその地域性（1）－瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開」『宮崎県総合博物館研究紀要』第九輯 宮崎県総合博物館
- (15) 田崎博之 1998「九州系の上器からみた凹線文系上器の時間位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- (16) 梅木謙一 2004「四国・南九州間における凹線文土器の交流」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助



A-2区・B区調査区全景



縄文時代調査区（B区）

図版2



縄文時代草創期調査区



自然流路検出状況



S I 1 検出状況



S I 1 半截状況



赤化砾の集まり 1



赤化砾の集まり 1 半截状況



赤化砾の集まり 2・3 検出状況



隆蒂文土器出土状況